



インストール・ガイド



バージョン 7.0



インストール・ガイド

**ご注意**

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、103ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Rational Application Developer (部品番号 5724-J19) バージョン 7.0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

IBM 発行のマニュアルに関する情報のページ

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

こちらから、日本語版および英語版のオンライン・ライブラリーをご利用いただけます。また、マニュアルに関するご意見やご感想を、上記ページよりお送りください。今後の参考にさせていただきます。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： GI11-8352-04  
Rational® Application Developer  
Version 7.0  
Installation guide

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2007.6

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体\*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注\* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、  
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2000, 2007. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2007

# 目次

概説	1
IBM Installation Manager	1
IBM Rational Software Development Platform	2
<b>インストール要件</b>	<b>3</b>
ハードウェア要件	3
ソフトウェア要件	4
ユーザー特権についての要件	5
<b>インストール計画</b>	<b>7</b>
インストール・シナリオ	7
インストールするフィーチャーの決定	8
フィーチャー	9
アップグレード、および共存についての考慮事項	12
製品の共存についての考慮事項	12
アップグレードに関する考慮事項	13
インストール・リポジトリ	14
Installation Manager のリポジトリ設定	14
パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリ	15
既存の Eclipse IDE の拡張	16
<b>電子イメージの確認および解凍</b>	<b>19</b>
ダウンロードしたファイルの解凍	19
<b>プリインストール・タスク</b>	<b>21</b>
<b>インストール作業</b>	<b>23</b>
Rational Application Developer の CD-ROM からのインストール: タスクの概要	23
ワークステーション上の電子イメージからの Rational Application Developer のインストール: タスクの概要	24
電子イメージからのインストール	24
共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Application Developer のインストール: タスクの概要	25
HTTP Web サーバー上のリポジトリからの Rational Application Developer のインストール: タスクの概要	25
HTTP Web サーバー上への Rational Application Developer の配置: タスクの概要	26
<b>IBM Installation Manager の管理</b>	<b>29</b>
Windows への Installation Manager のインストール	29
Linux への Installation Manager のインストール	29
Windows での Installation Manager の開始	30
Linux での Installation Manager の開始	30
Windows での Installation Manager のアンインストール	30
Linux での Installation Manager のアンインストール	31

Installation Manager のサイレント・インストールとアンインストール	31
Windows での Installation Manager のサイレント・インストール	31
Linux での Installation Manager のサイレント・インストール	31
Windows からの Installation Manager のサイレント・アンインストール	32
Linux からの Installation Manager のサイレント・アンインストール	32

<b>ランチパッド・プログラムからのインストール</b>	<b>33</b>
ランチパッド・プログラムの開始	33
ランチパッド・プログラムからのインストールの開始	34

<b>IBM Installation Manager GUI を使用した IBM Rational Application Developer のインストール</b>	<b>35</b>
--	-----------

<b>サイレント・インストール</b>	<b>39</b>
応答ファイルの作成	39
サイレント・インストール・モードでの Installation Manager の実行	40
すべての使用可能な製品の検索とサイレント・インストール	41
現在インストールされているすべての製品に対する更新のサイレント・インストール	41
応答ファイルのコマンド	42
サイレント・インストール設定コマンド	42
サイレント・インストール・コマンド	45
参照: サンプル応答ファイル	49
サイレント・インストール・ログ・ファイル	50

<b>IBM Packaging Utility</b>	<b>51</b>
Packaging Utility のインストール	51
Packaging Utility を使用した HTTP サーバーへの製品パッケージのコピー	52

<b>ライセンスの管理</b>	<b>55</b>
ライセンス	55
ライセンスの使用可能化	56
インストール済みパッケージのライセンス情報の表示	57
プロダクト・アクティベーション・キットのインポート	57
フローティング・ライセンスの使用可能化	58
ライセンスの購入	59

<b>Linux ワークステーション上のファイ ル・ハンドル数を増やす</b>	<b>61</b>
<b>Rational Application Developer の開始</b>	<b>63</b>
<b>インストールの変更</b>	<b>65</b>
<b>Rational Application Developer の更新</b>	<b>67</b>
<b>Rational Application Developer のアン インストール</b>	<b>69</b>
<b>オプション・ソフトウェアのインストール</b>	<b>71</b>
WebSphere Portal テスト環境、バージョン 5.1.0.x の インストール	71
CD-ROM または電子イメージからの WebSphere Portal テスト環境、バージョン 5.1.0.x のインス トール	71
DB2 または Oracle データベースを WebSphere Portal 構成リポジトリとして使用	73
WebSphere Portal テスト環境、バージョン 5.1.0.x のアンインストール	73
WebSphere Portal バージョン 6.0 テスト環境のイン ストール	74
CD-ROM または電子イメージからの WebSphere Portal テスト環境、バージョン 6.0 のインストー ル	74
DB2、Oracle、または SQL Server データベース を WebSphere Portal 構成リポジトリとして使 用	77
WebSphere Portal テスト環境、バージョン 6.0 の アンインストール	77
Agent Controller のインストール	78

ハードウェア前提条件	79
サポートされるプラットフォーム	79
サポートされる JVM	80
インストール・ファイルの探索	81
ワークステーション (AIX、HP- UX、Linux、Windows、Solaris) への Agent Controller のインストール	81
OS/400 (iSeries) への Agent Controller のインスト ール	89
z/OS (OS/390) への Agent Controller のインスト ール	91
Agent Controller セキュリティー機能の使用	93
ワークベンチおよび Agent Controller 間の互換性 についての要約	93
既知の問題と制限事項	94
ClearCase LT のインストール	94
ClearCase LT のインストール説明およびリリース 情報の探索	95
Rational ClearCase LT のインストールの開始	96
Rational ClearCase LT ライセンスの構成	97
Crystal Reports Server XI Release 2 のインストール	97
Windows への Crystal Reports Server XI Release 2 のインストール	97
Windows からの Crystal Reports Server XI Release 2 のアンインストール	100
Linux への Crystal Reports Server XI Release 2 のインストール	100
Linux からの Crystal Reports Server XI Release 2 のアンインストール	101
<b>特記事項</b>	<b>103</b>
商標	104

---

## 概説

このインストール・ガイドには、IBM® Rational® Application Developer のインストールおよびアンインストール方法が記載されています。

この「インストール・ガイド」の最新版は、[http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/v7/rad/70/docs/install\\_instruction/install.html](http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/v7/rad/70/docs/install_instruction/install.html) でオンラインで入手可能です。

注: 文書の更新内容やトラブルシューティングの情報については、<http://www.ibm.com/software/rational/support/documentation/> を参照してください。

---

## IBM Installation Manager

IBM Installation Manager は、ワークステーションに Rational Application Developer 製品パッケージをインストールするプログラムです。インストールしたこのパッケージや他のパッケージの更新、変更、およびアンインストールも行います。パッケージとは、Installation Manager によってインストールされるよう設計された製品、複数コンポーネントのグループ、または単一のコンポーネントです。

こういったインストール・シナリオに従ってワークステーション上に Rational Application Developer をインストールするかに関わらず、Rational パッケージのインストールを行うには Installation Manager を使用します。

IBM Installation Manager は、時間を節約するのに役立つ多数の機能を提供します。インストールしようとしているパッケージ、インストール済みのソフトウェア・コンポーネント、およびインストール用に使用可能なコンポーネントを追跡します。更新を検索するので、最新バージョンの Rational 製品パッケージをインストールしていることがわかります。また、Installation Manager は、インストールした製品パッケージのライセンス管理のためのツールを提供します。さらに、パッケージの更新と変更用のツールを提供します。Installation Manager を使用して、製品パッケージをアンインストールすることもできます。

IBM Installation Manager には 6 つのウィザードがあり、ライフ・サイクルを通じて製品パッケージの保守が簡単になります。

- 「パッケージのインストール」ウィザードは、インストール・プロセスを支援します。デフォルト設定を単に受け入れるか、デフォルト設定を変更してカスタム・インストールを作成することで、製品パッケージをインストールできます。製品パッケージのインストールを行う前に、ウィザードで選択したすべての項目の要約が表示されます。ウィザードを使用すると、1 つ以上の製品パッケージを一度にインストールできます。
- 「製品パッケージの更新」ウィザードは、インストール済みパッケージに使用可能な更新を検索します。更新は、リリース済みのフィックス、新規フィーチャー、または Rational 製品の新しいバージョンである可能性があります。ウィザードには更新内容の詳細が表示されます。更新を適用するかどうかを選択できます。

- 「パッケージの変更」ウィザードを使用すると、すでにインストール済みのパッケージから特定の要素を変更できます。製品パッケージの初期インストール時に、インストールするフィーチャーを選択します。後で他のフィーチャーが必要になった場合は、「パッケージの変更」ウィザードを使用して、それらを製品パッケージのインストールに追加できます。フィーチャーの除去、言語の追加または除去も可能です。
- 「ライセンスの管理」ウィザードを使用すると、パッケージのライセンスをセットアップできます。このウィザードを使用して、ライセンスの評価版を完全なライセンスに変更できます。また、フローティング・ライセンス用にサーバーをセットアップしたり、それぞれのパッケージにどのライセンス・タイプを使用するかを選択したりすることができます。
- 「パッケージのロールバック」ウィザードでは、適格なパッケージの前回インストールしたバージョンに戻すことができます。
- 「パッケージのアンインストール」ウィザードを使用すると、コンピューターから製品パッケージが除去されます。一度に複数のパッケージをアンインストールできます。

---

## IBM Rational Software Development Platform

IBM Rational Software Development Platform は、複数の製品を共用する開発ワークベンチとその他のソフトウェア・コンポーネントを含む共通開発環境です。

開発プラットフォームには、以下が含まれています。

- Rational Application Developer
- Rational Functional Tester
- Rational Performance Tester
- Rational Software Architect
- Rational Software Modeler
- Rational Systems Developer
- Rational Tester for SOA Quality

Rational Manual Tester も使用可能ですが、このプラットフォームの一部ではありません。Manual Tester は、Rational Functional Tester と一緒に組み込まれていますが、別途購入することも可能です。

### Rational Application Developer について

IBM Rational Application Developer for WebSphere® Software は、包括的な統合開発環境であり、高速 Web、Java™、Web サービス、および Enterprise JavaBeans™ (EJB) 開発を含め、J2EE プログラミング・モデルを完全にサポートしています。

IBM Support Assistant (ISA) は、Linux® オペレーティング・システム向けの無料のローカル・ソフトウェア保守性ワークベンチです。これは、IBM ソフトウェア製品の疑問と問題点の解決に役立ちます。また、問題診断のための保守性ツールとともに、サポート関連情報容易にアクセスできます。詳しくは、<http://www.ibm.com/software/support/isa/> を参照してください。



## インストール要件

このセクションでは、ソフトウェアを正常にインストールし、実行するために満たす必要がある、ハードウェア、ソフトウェア、およびユーザー特権の要件について説明します。

### ハードウェア要件

製品をインストールする前に、ご使用のシステムが最小ハードウェア要件を満たしていることを確認してください。

ハードウェア	要件
プロセッサ	最小: 800 MHz Pentium® III (最適な結果を得るためにはそれ以上)
メモリー	最小: 1 GB RAM
ディスク・スペース	<p>最小: 2 GB のディスク・スペースが、製品パッケージのインストール時に必要です。さらに、開発するリソース用の追加ディスク・スペースが必要になります。</p> <p><b>注:</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>• ディスク・スペース要件は、インストールするフィーチャーによって増減する場合があります。</li><li>• この製品をインストールするための製品パッケージをダウンロードする場合は、追加のディスク・スペースが必要になります。</li><li>• Windows® の場合: NTFS の代わりに FAT32 を使用する場合は、追加のディスク・スペースが必要になります。</li><li>• Windows の場合: ご使用の環境変数 TEMP でポイントされる TEMP ディレクトリーに、追加で 500 MB のディスク・スペースが必要となります。</li><li>• Linux の場合: 追加で 500 MB のディスク・スペースが /tmp ディレクトリーに必要となります。</li></ul>
ディスプレイ	最低でも 256 色を使用する 1024 x 768 のディスプレイ (最適な結果を得るためにはそれ以上)
その他のハードウェア	Microsoft® マウスまたは互換のポインティング・デバイス

---

## ソフトウェア要件

製品をインストールする前に、ご使用のシステムがソフトウェア要件を満たしていることを確認してください。

### オペレーティング・システム

次のオペレーティング・システムが、この製品でサポートされています。

- Microsoft Windows XP Professional (Service Pack 1 または2)
- Windows XP Professional x64 Edition (AMD プロセッサで稼働)
- Microsoft Windows 2000 Professional (Service Pack 4)
- Microsoft Windows 2000 Server (Service Pack 4)
- Microsoft Windows 2000 Advanced Server (Service Pack 4)
- Microsoft Windows Server 2003 Standard Edition (Service Pack 1)
- Microsoft Windows Server 2003 Enterprise Edition (Service Pack 1)
- **(Rational Application Developer バージョン 7.0.0.2 以降の場合)** Microsoft Windows Vista Business、Windows Vista Enterprise、および Windows Vista Ultimate
- Red Hat Enterprise Linux Workstation バージョン 4.0
- Red Hat Desktop バージョン 4.0 (32 ビット・モードで稼働)
- SUSE Linux Enterprise Server (SLES) バージョン 9 (すべての Service Pack、32 ビット・モード)

リストされているオペレーティング・システムでは、Rational Application Developer でサポートされるすべての言語がサポートされます。

### 既存の Eclipse の拡張要件

このバージョンの IBM Rational Software Development Platform の製品は、Eclipse IDE バージョン 3.2.1 以降での使用を前提に、開発されました。既存の Eclipse IDE の拡張は、[eclipse.org](http://eclipse.org) から提供される最新の更新が適用されたバージョン 3.2.1 でのみ可能です。

既存の Eclipse IDE を拡張するには、以下のいずれかの Java 開発キットの JRE も必要です。

- Windows の場合: IBM 32-bit SDK for Windows、Java 2 Technology Edition、バージョン 5.0 サービス・リリース 3、Sun Java 2 Standard Edition 5.0 Update 9 for Microsoft Windows。*Microsoft Windows Vista* の場合 (Rational Application Developer バージョン 7.0.0.2 以降が必要): IBM 32-bit SDK for Windows、Java 2 Technology Edition、バージョン 5.0 サービス・リリース 4、Sun Java 2 Standard Edition 5.0 Update 11 for Microsoft Windows
- Linux の場合: IBM 32-bit SDK for Linux (Intel® アーキテクチャー上)、Java 2 Technology Edition、バージョン 5.0 サービス・リリース 3、Sun Java 2 Standard Edition 5.0 Update 9 for Linux x86 (SUSE Linux Enterprise Server [SLES] バージョン 9 は非サポート)

注:

- Sun JRE でサポートされていない機能は、次のとおりです。

- Web 開発ツール
- ドメイン・モデリング・ツール
- J2EE コネクタ (J2C) ツール
- ポータルおよびポータルレット・ツール
- WebSphere Application Server 開発およびサーバー
- 更新を Rational Application Developer にインストールするには、Eclipse バージョンの更新が必要な場合があります。前提となる Eclipse バージョンへの変更については、更新情報のリリース文書を参照してください。

**重要:** (*Rational Application Developer* バージョン 7.0.0.2 以降のみ) 管理者特権を持たないユーザーが *Rational Application Developer* を Windows Vista システム上で作業するには、Program Files ディレクトリ (C:\Program Files) 内に Eclipse をインストールしないでください。

### 追加のソフトウェア要件

- Linux の場合: GNU Image Manipulation Program Toolkit (GTK+) バージョン 2.2.1 以降および関連ライブラリー (GLib、Pango)。
- 以下の Web ブラウザーのいずれか (README ファイルと「インストール・ガイド」を表示し、Standard Widget Toolkit (SWT) ブラウザー・ウィジェットをサポートするために必要です)。
  - Windows の場合: Microsoft Internet Explorer 6.0 (Service Pack 1)。
  - Mozilla 1.6 または 1.7。
  - Firefox 1.0.x または 1.5。

**注:** Red Hat Enterprise Linux Workstation バージョン 4.0 では、環境変数 MOZILLA\_FIVE\_HOME を、Firefox または Mozilla インストールが入っているフォルダーに設定する必要があります。例えば、setenv MOZILLA\_FIVE\_HOME /usr/lib/firefox-1.5 です。

**注:** ランチパッドでは Mozilla 1.6 がサポートされていません。ご使用のブラウザーが Mozilla の場合にランチパッドを実行するには、バージョン 1.7 以上が必要が必要です。

- ツアー、チュートリアル、およびデモンストレーション・ビューレットなどのマルチメディア・ユーザー支援を正しく表示するには、Adobe Flash Player をインストールする必要があります。
  - Windows の場合: バージョン 6.0 リリース 65 以降
  - Linux の場合: バージョン 6.0 リリース 69 以降
- サポートされるデータベース・サーバー、Web アプリケーション・サーバー、およびその他のソフトウェア製品については、オンライン・ヘルプを参照してください。

---

## ユーザー特権についての要件

*Rational Application Developer* をインストールするには、以下の要件を満たすユーザー ID が必要です。

- ユーザー ID には 2 バイト文字が含まれてはいけません。

- Windows の場合: インストール時に必要となるユーザー特権は、ご使用のコンピューターの Windows バージョンによって決まります。
  - (**Rational Application Developer バージョン 7.0.0.2 以降のみ**) Windows Vista の場合、管理者アカウントでログインして、次のタスクを実行します (または、プログラム・ファイルまたはショートカットを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択して、管理者として実行してください)。
    - IBM Installation Manager (Rational Application Developer のインストールおよび更新を行うアプリケーション) をインストールまたは更新します。
    - 製品オフリングをインストールまたは更新します。
    - ご使用の製品の許可ユーザー・ライセンス・キーをインストールします。IBM Installation Manager を使用して、ライセンス・キーをインストールします。
- 注: 管理者ではないユーザーが Windows Vista システム上で Rational Application Developer を作業するには、以下の点に注意してください。
  - Rational Application Developer を、Program Files ディレクトリー (C:¥Program Files¥) のパッケージ・グループ (インストール・ロケーション) にインストールしないでください。また、Program Files ディレクトリーの共用リソース・ディレクトリーを選択しないでください。
  - 既存の Eclipse インストールを拡張している場合、Program Files ディレクトリー (C:¥Program Files¥) に Eclipse をインストールしないでください。
- サポート対象である、その他の Windows バージョンの場合、管理者グループに属するユーザー ID を使用する必要があります。
- Linux の場合: root としてログインできる必要があります。

---

## インストール計画

どの製品フィーチャーをインストールする場合にも、事前にこのセクションのすべてのトピックをご一読ください。効果的なプランニングと、インストール・プロセスの主要な段階を理解することが、インストールの成功につながります。

---

## インストール・シナリオ

Rational Application Developer をインストールする際に使用できるシナリオは多数あります。

以下に、インストール・シナリオを決定するいくつかの要素を挙げます。

- インストール・ファイルにアクセスするときに使用する形式および方式 (例えば、CD からアクセスする、IBM パスポート・アドバンテージ® からダウンロードしたファイルからアクセスするなど)。
- インストールのロケーション (例えば、ご自身のワークステーション上に製品をインストールしたり、インストール・ファイルを企業内で使用できるようにしたりすることができます)。
- インストールのタイプ (例えば、Installation Manager の GUI を使用したり、サイレント・インストールを行うことができます)。

典型的なインストール・シナリオには、以下のものがあります。

- CD からのインストール。
- ワークステーションにダウンロードした電子イメージからのインストール。
- 共用ドライブ上の電子イメージからのインストール。
- HTTP または HTTPS サーバー上のリポジトリからのインストール。

後の 3 つのシナリオでは、サイレント・モードで Installation Manager プログラムを実行して、Rational Application Developer をインストールすることを選択できます。Installation Manager のサイレント・モードでの実行について詳しくは、39 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

基本製品パッケージのインストールと同時に更新もインストールできることにも注意してください。

### CD からのインストール

このインストール・シナリオでは、お客様は製品パッケージのファイルが含まれている CD を持っており、通常は、ご自身のワークステーション上に Rational Application Developer をインストールします。このステップの概要については、23 ページの『Rational Application Developer の CD-ROM からのインストール: タスクの概要』を参照してください。

## ワークステーションにダウンロードした電子イメージからのインストール

このシナリオでは、お客様は IBM パスポート・アドバンテージからインストール・ファイルをダウンロードしており、ご自身のワークステーション上に Rational Application Developer をインストールします。このステップの概要については、24 ページの『ワークステーション上の電子イメージからの Rational Application Developer のインストール: タスクの概要』を参照してください。

## 共用ドライブ上の電子イメージからのインストール

このシナリオでは、お客様は共用ドライブ上に電子イメージを置いて、社内のユーザーが 1 つのロケーションから Rational Application Developer のインストール・ファイルにアクセスできるようにします。このステップの概要については、25 ページの『共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Application Developer のインストール: タスクの概要』を参照してください。

## HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール

このシナリオは、ネットワークを通じて製品をインストールする最速の方式です。このシナリオは、共用ドライブ・インストールとは異なります。Rational Application Developer の製品パッケージ・ファイルを HTTP Web サーバー上に置くためには、IBM Packaging Utility というユーティリティー・アプリケーションを使用する必要があります。このユーティリティーは、Rational Application Developer に提供されており、パッケージ形式のインストール・ファイルをコピーします。この形式を使用することにより、Rational Application Developer を HTTP Web サーバーから直接インストールできます。パッケージが含まれている HTTP Web サーバー上のディレクトリは、リポジトリと呼ばれます。このシナリオでは、Rational Application Developer のインストール・ファイルのみがパッケージ内にあることに注意してください。このステップの概要については、25 ページの『HTTP Web サーバー上のリポジトリからの Rational Application Developer のインストール: タスクの概要』および 26 ページの『HTTP Web サーバー上への Rational Application Developer の配置: タスクの概要』を参照してください。

---

## インストールするフィーチャーの決定

バージョン 7.0 では、インストールする Rational Application Developer のフィーチャーを選択することにより、ソフトウェア製品をカスタマイズできます。

IBM Installation Manager を使用して Rational Application Developer の製品パッケージをインストールする場合は、使用可能な製品パッケージに入っているフィーチャーがインストール・ウィザードに表示されます。このフィーチャー・リストから、インストールするフィーチャーを選択できます。デフォルトの一連のフィーチャーが選択されています (必須フィーチャーはすべて含まれています)。フィーチャー間に依存関係があれば、Installation Manager はそれを強化し、必要なフィーチャーが消去されないようにします。

注: パッケージのインストールを完了した後も、Installation Manager で「パッケージの変更」ウィザードを実行して、ソフトウェア製品のフィーチャーを追加または除去することができます。詳しくは、65 ページの『インストールの変更』を参照してください。

## フィーチャー

以下の表には、インストールを選択できる Rational Application Developer のフィーチャーが示されています。デフォルトで選択されているインストールするフィーチャーは、異なる場合があります。フィーチャーがすでに共用リソース・ディレクトリーに存在している場合は、デフォルトでは選択されず、再度インストールされることはありません。

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
Web 開発ツール	JavaServer Faces、JavaServer Pages、サーブレット、HTML を使用して J2EE Web アプリケーションを構築するためのツールを提供します。	はい
Struts ツール	Apache Struts フレームワークを使用して J2EE Web アプリケーションを開発するためのツールを提供します。	いいえ
Crystal Reports 用ツール	Crystal Reports の報告機能が必要なアプリケーションを開発するためのビジュアル・ツールを提供します。	はい
J2EE および Web サービス開発ツール	J2EE アプリケーションおよび Web サービスを開発するためのツールを提供します。	はい
Java クライアント・アプリケーション・エディター	グラフィカル・ユーザー・インターフェースを持つ Java クライアント・アプリケーション (SWT、AWT、または Swing UI ライブラリーを使用) をビルドおよびテストするためのツールを提供します。	はい
ビジュアル・エディター	Java クラス、エンタープライズ Bean、データ・テーブル、および XML スキーマを作成するためのグラフィカルな編集環境を提供します。	はい

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
コード・レビュー	コードを検査し、各規則やベスト・プラクティスに準拠しているかを調べます。問題の起こりそうな箇所を強調表示し、品質向上のためのコード変更を推奨します。準拠のためのフィックスが、自動的に適用される場合があります。	はい
テストおよびパフォーマンス・ツール・プラットフォーム (TPTP)	アプリケーションのテスト用の Eclipse ツールを提供します。ツール機能にはプロファイル作成、モニター、ログ作成、コンポーネント・テスト (JUnit)、および静的解析またはコード・レビューが含まれます。	はい
J2EE コネクタ (J2C) ツール	CICS® および IMS™ システム用の J2C クライアント・アプリケーションの作成を支援する、堅固なツール・セットです。データ・バインディング・ウィザードを使用して、COBOL、PL/I、および C 言語に対応した Java マーシャル・コードを作成します。	いいえ
Rational ClearCase® SCM アダプター	IBM Rational ClearCase SCM および ClearCase MVFS プラグインを提供します。これらを使用すると、ClearCase のバージョン・オブジェクト・ベース (VOB) にソフトウェア成果物の管理バージョンを作成することができます。これらのプラグインは、ClearCase VOB およびビュー・サーバーをインストールする際にも、スナップショット・ビューと動的ビューを使用します。	はい
Rational RequisitePro® 統合 (Windows 用のみ)	緊密に統合された要件管理ツールを提供します。IBM Rational RequisitePro がインストールされていると、要件とソフトウェア成果物との間で追跡が可能になります。	いいえ



フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
Rational Unified Process® (RUP®) Process Advisor および Process Browser	ソフトウェア開発と IBM Rational Software Development Platform の使用についてのコンテキスト・センシティブ・ガイダンスを提供する Process Advisor、およびユーザーの現在のタスク、成果物、ツールに関するヘルプを提供する Process Browser があります。	はい
変換オーサリング	カスタムの変換を作成したり、既存の変換をカスタマイズしたりするためのツールを提供します。変換により、モデル・コンテンツや実装コードを生成するタスクが自動化されます。	いいえ
プラグイン開発環境 (PDE)	Eclipse 環境を拡張するために使用できる Eclipse プラグインの作成、開発、テスト、デバッグ、およびデプロイするためのツールを提供します。	いいえ
Java エミッター・テンプレート (JET) 拡張性	JET テクノロジー拡張性フィーチャーを使用すると、プログラミング・インターフェース (API)、拡張ポイント、およびユーティリティを使用して、JET 変換を作成し、JET エンジンを開発できます。	いいえ
データ・ツール	データベースを定義し、それで作業するためのリレーショナル・データベース・ツールを提供します。表、ビュー、およびフィルターの定義と処理、SQL ステートメントの作成と処理、DB2® ルーチンの作成と処理、および SQLJ ファイルの作成と処理を行うことができます。このツールを使用して、SQL DDL、DADX、および XML ファイルを生成することもできます。	いいえ

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
ポータルツール	ポータル・アプリケーションの作成、カスタマイズ、テスト、デバッグ、およびデプロイを行うためのツールを提供します。ポータル開発ツールでは、IBM WebSphere Portal バージョン 5.1 および 6.0 がサポートされています。	いいえ
WebSphere Application Server 開発ツール	WebSphere Application Server 開発用ツールを提供します。	はい
WebSphere Application Server コンパイル時依存コンポーネント	IBM WebSphere Application Server 向けアプリケーションのビルド、コンパイル、デバッグおよびデプロイに必要なコンポーネントを提供します。	はい
IBM WebSphere Application Server Express バージョン 5.1	IBM WebSphere Application Server Express バージョン 5.1 を、ターゲット・ランタイム環境として提供します。	いいえ
IBM WebSphere Application Server バージョン 5.1	IBM WebSphere Application Server バージョン 5.1 を、ターゲット・ランタイム環境として提供します。	いいえ
IBM WebSphere Application Server バージョン 6.0	IBM WebSphere Application Server バージョン 6.0 を、ターゲット・ランタイム環境として提供します。	いいえ
IBM WebSphere Application Server バージョン 6.1	IBM WebSphere Application Server バージョン 6.1 を、ターゲット・ランタイム環境として提供します。	はい

## アップグレード、および共存についての考慮事項

前のバージョンの製品がある場合、または同じワークステーションに複数の Rational Software Development Platform 製品をインストールする計画がある場合は、このセクションの情報を検討してください。

### 製品の共存についての考慮事項

一部の製品は、同じパッケージ・グループにインストールされた場合、それと共存し、機能を共有するように設計されています。パッケージ・グループは、1 つ以上のソフトウェア製品またはパッケージをインストールできるロケーションです。各パッケージをインストールする場合は、そのパッケージを既存のパッケージ・グループにインストールするか、または新規にパッケージ・グループを作成するのかが選択されます。IBM Installation Manager は、共有するように設計されていない製品

や、バージョンの許容度およびその他の要件を満たさない製品をブロックします。一度に複数の製品をインストールする場合は、製品でパッケージ・グループを共用できなければなりません。

リリース時点で、パッケージ・グループにインストールされた場合に機能を共用する製品は、以下のとおりです。

- Rational Application Developer
- Rational Software Architect
- Rational Functional Tester
- Rational Performance Tester
- Rational Software Modeler
- Rational Systems Developer
- Rational Tester for SOA Quality

適格製品であれば、1つのパッケージ・グループにいくつでもインストールできます。製品がインストールされると、その機能はパッケージ・グループ内の他のすべての製品で共用されます。開発製品とテスト製品を1つのパッケージ・グループにインストールする場合、製品のいずれか一方を始動すると、開発とテストの両方の機能がユーザー・インターフェースで使用可能になります。製品にモデリング・ツールを追加すると、パッケージ・グループ内のすべての製品で、開発、テストおよびモデリングの機能が使用可能になります。

開発製品をインストールし、その後で追加の機能を持つ開発製品を購入して、同じパッケージ・グループにその製品を追加すると、両方の製品で追加の機能が使用可能になります。より多くの機能を持つ製品をアンインストールした場合、元の製品はそのまま残ります。これは、Rational Software Development Platform におけるバージョン 6 製品の「アップグレード」の動作とは異なることに注意してください。

**注:** 固有のロケーションにインストールされた各製品は、1つのパッケージ・グループとしか関連付けることができません。複数のパッケージ・グループと関連付けるためには、製品を複数のロケーションにインストールする必要があります。Rational Functional Tester および Rational Performance Tester は、コンピューター上の1つのロケーションにしかインストールできません。

## アップグレードに関する考慮事項

すでにワークステーションにインストールされている Rational Application Developer の前のバージョンをバージョン 7.0 に変更することはできません。しかし、Rational Application Developer バージョン 7.0 は、以前のバージョンと共存可能です。

ワークスペース、プロジェクトおよび成果物は、WebSphere Studio Developer バージョン 5.1.2 および Rational Application Developer バージョン 6.0 からバージョン 7.0 にマイグレーションできます。詳しくは、オンライン・ヘルプのマイグレーションの資料を参照してください。

Rational Application Developer バージョン 7 を初めて起動する際、デフォルトで新規ワークスペースに設定されていることに注意してください。必ずマイグレーションの資料をお読みになったうえで、Rational Application Developer バージョン 7.0 で既存のワークスペースを開くようにしてください。

Agent Controller の前のバージョンがある場合は、それを停止してアンインストールし、ファイルが残っている場合はそれらをすべてクリーンアップしてから、この Agent Controller のバージョンをインストールしてください。詳しくは、『Agent Controller のインストール』 (第 6 章) を参照してください。

---

## インストール・リポジトリ

IBM Installation Manager は、指定のリポジトリ・ロケーションから製品パッケージを取得します。

ランチパッドを使用して Installation Manager を開始すると、リポジトリ情報が Installation Manager に渡されます。Installation Manager を直接開始した場合は、インストールする製品パッケージが格納されたインストール・リポジトリを指定する必要があります。『Installation Manager のリポジトリ設定』を参照してください。

一部の組織では、製品パッケージをイントラネットに組み込み、ホスティングします。この種のインストール・シナリオについては、8 ページの『HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール』を参照してください。システム管理者から正しい URL を提供してもらう必要があります。

デフォルトでは、IBM Installation Manager は、各 Rational ソフトウェア開発製品に組み込まれている URL を使用して、インターネットを介してリポジトリ・サーバーに接続します。その後、Installation Manager が製品パッケージと新規フィーチャーを検索します。

### Installation Manager のリポジトリ設定

Rational Application Developer のインストールをランチパッド・プログラムから開始する場合は、IBM Installation Manager の開始時に、インストールする製品パッケージを含むリポジトリのロケーションが Installation Manager に自動的に定義されます。しかし、直接 Installation Manager を開始する場合 (例えば、Rational Application Developer を Web サーバー上にあるリポジトリからインストールする場合) は、まず Installation Manager でリポジトリ設定 (製品パッケージが含まれるディレクトリの URL) を指定しておかなければ、製品パッケージはインストールできません。このリポジトリ・ロケーションは、「設定」ウィンドウの「リポジトリ」ページで指定します。デフォルトでは、IBM Installation Manager は、各 Rational ソフトウェア開発製品に組み込まれている URL を使用して、インターネットを介してリポジトリ・サーバーに接続し、インストール可能なパッケージおよび新規フィーチャーを検索します。組織によっては、イントラネット・サイトを使用するためにリポジトリをリダイレクトする必要があります。

**注:** インストール・プロセスを開始する前に、必ず管理者からインストール・パッケージのリポジトリの URL を取得してください。

Installation Manager でリポジトリ・ロケーションを追加、編集、または除去するには、以下のようにします。

1. Installation Manager を開始します。

2. Installation Manager の「始動」ページで、「ファイル」→「設定」をクリックしてから「リポジトリ」をクリックします。「リポジトリ」ページが開きます。このページには、使用可能なリポジトリ、そのロケーション、およびアクセス可能かどうかが表示されます。
3. 「リポジトリ」ページで、「リポジトリの追加」をクリックします。
4. 「リポジトリの追加」ウィンドウで、リポジトリ・ロケーションの URL を入力するか、ブラウズしてファイル・パスを設定します。
5. 「OK」をクリックします。HTTPS リポジトリ・ロケーションを指定した場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。新規または変更されたリポジトリ・ロケーションがリストされます。リポジトリがアクセス不可の場合は、「接続」列に赤い x が表示されます。
6. 「OK」をクリックして終了します。

**注:** Installation Manager によってデフォルトのリポジトリ・ロケーションでインストール済みパッケージを検索する場合は、「リポジトリ」の設定ページで「インストールと更新を行っている間にサービス・リポジトリを検索します」の設定が選択されていることを確認します。この設定はデフォルトで選択されています。

---

## パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリー

IBM Installation Manager を使用して Rational Application Developer パッケージをインストールする場合は、パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリーを選択する必要があります。

### パッケージ・グループ

インストール・プロセス中に、Rational Application Developer パッケージのパッケージ・グループを指定する必要があります。パッケージ・グループは、パッケージが同じグループ内の他のパッケージとリソースを共用するディレクトリーを表します。Installation Manager を使用して Rational Application Developer パッケージをインストールする場合は、新規パッケージ・グループを作成するか、またはパッケージを既存のパッケージ・グループにインストールできます。(一部のパッケージは、パッケージ・グループを共用できない場合があります。その場合、既存パッケージ・グループを使用するオプションが使用不可になります。)

一度に複数のパッケージをインストールする場合は、すべてのパッケージが同じパッケージ・グループにインストールされる点に注意してください。

パッケージ・グループには自動的に名前が割り当てられます。ただし、パッケージ・グループのインストール・ディレクトリーは選択できます。

製品パッケージのインストールが成功し、パッケージ・グループが作成された後に、インストール・ディレクトリーを変更することはできません。インストール・ディレクトリーには、パッケージ・グループにインストールされた Rational Application Developer 製品パッケージに固有のファイルおよびリソースが含まれます。他のパッケージに使用される可能性のある製品パッケージ内のリソースは、共用リソース・ディレクトリーに置かれます。

**重要:** (*Rational Application Developer* バージョン 7.0.0.2 以降のみ) 管理者特権を持たないユーザーが *Rational Application Developer* を Windows Vista オペレーティング・システム上で作業するには、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files¥) 内のディレクトリーを選択しないでください。

## 共用リソース・ディレクトリー

共用リソース・ディレクトリー は、1 つ以上の製品パッケージ・グループで使用できるインストール作成物を配置するディレクトリーです。

**重要:**

- 共用リソース・ディレクトリーは、パッケージの初回インストール時に指定できます。最良の結果を得るには、一番大きいドライブを使用してください。すべてのパッケージをアンインストールするまで、ディレクトリー・ロケーションを変更することはできません。
- (*Rational Application Developer* バージョン 7.0.0.2 以降のみ) 管理者特権を持たないユーザーが *Rational Application Developer* を Windows Vista システム上で作業するには、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files¥) 内のディレクトリーを選択しないでください。

## 既存の Eclipse IDE の拡張

*Rational Application Developer* 製品パッケージをインストールする際に、コンピューターにすでにインストール済みの Eclipse 統合開発環境 (IDE) を拡張することを選択することができます。拡張は、*Rational Application Developer* パッケージに含まれている機能を追加することによって実現できます。

IBM Installation Manager を使用してインストールされた *Rational Application Developer* パッケージは、あるバージョンの Eclipse IDE、つまりワークベンチが組み込まれています。この組み込まれたワークベンチは、Installation Manager パッケージの機能を提供する際の基本プラットフォームになります。ただし、ワークステーション上に既存の Eclipse IDE がある場合は、この IDE を拡張するかどうかを選択可能です。つまり、*Rational Application Developer* パッケージで提供される追加機能を、IDE に追加するかどうかを選択できるわけです。

既存の Eclipse IDE を拡張するには、「パッケージのインストール」ウィザードの「ロケーション」ページで、「**既存の Eclipse IDE の拡張 (Extend an existing Eclipse IDE)**」オプションを選択します。

**重要:** (*Rational Application Developer* バージョン 7.0.0.2 以降のみ) 管理者特権を持たないユーザーが *Rational Application Developer* を Windows Vista オペレーティング・システム上で作業するには、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files¥) 内に Eclipse をインストールしないでください。

既存の Eclipse IDE を拡張するのは、例えば、*Rational Application Developer* パッケージで提供されている機能はほしいが、*Rational Application Developer* パッケージが提供する機能で作業する場合に、現行 IDE の設定も保持したい場合です。すでに Eclipse IDE を拡張しているインストール済みのプラグインを使用して、作業をしたいという場合もあります。

拡張するには、既存の Eclipse IDE はバージョン 3.2.1 または eclipse.org から提供される最新の更新でなければなりません。Installation Manager は、指定した Eclipse インスタンスがインストール・パッケージの要件を満たしているか検査します。

注: 更新を Rational Application Developer にインストールするには、Eclipse バージョンの更新が必要な場合があります。前提となる Eclipse バージョンへの変更については、更新情報のリリース文書を参照してください。





---

## 電子イメージの確認および解凍

IBM パスポート・アドバンテージからインストール・ファイルをダウンロードする場合は、圧縮ファイルから電子イメージを解凍した後に、Rational Application Developer をインストールする必要があります。イメージを解凍する前に、ファイルのダウンロードが完全に行われたことを確認する必要があります。

公開された MD5 の値とダウンロードしたファイルの検査合計を比較して、ダウンロードしたファイルが破損していないか、または完全であるかどうかを確認できます。

---

## ダウンロードしたファイルの解凍

圧縮ファイルは、それぞれ同じディレクトリーに解凍します。Linux の場合: ディレクトリー名にスペースを使用しないでください。スペースを使用すると、コマンド行からランチパッドを開始するための `launchpad.sh` コマンドを実行できなくなります。



---

## プリインストール・タスク

製品をインストールする前に、以下のステップを実行しておく必要があります。

1. ご使用のシステムがセクション 3 ページの『インストール要件』に記載されている要件を満たしていることを確認します。
2. ご使用のユーザー ID が製品のインストールに必要なアクセス権を満たしていることを確認します。5 ページの『ユーザー特権についての要件』を参照してください。
3. セクション 7 ページの『インストール計画』を一読します。特に、トピック 12 ページの『アップグレード、および共存についての考慮事項』をよくお読みください。
4. Linux の場合: root 以外のユーザーも製品を使用できるようにしたい場合は、**製品をインストールする前に**、umask 変数を 0022 に設定する必要があります。この変数を設定するには、root ユーザーとしてログインして端末セッションを開始し、umask 0022 と入力してください。



---

## インストール作業

次のセクションでは、7 ページの『インストール・シナリオ』のセクションに記載されているインストール・シナリオの概要を示します。詳しい説明には、メイン・ステップのリンクからアクセスできます。

---

### Rational Application Developer の CD-ROM からのインストール: タスクの概要

このインストール・シナリオでは、インストール・ファイルが含まれている CD を持っており、通常は、そこからワークステーション上に Rational Application Developer をインストールします。

CD からインストールする一般的な手順は、次のとおりです。

1. 21 ページの『プリインストール・タスク』 にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. 1 枚目のインストール CD を CD ドライブに挿入します。
3. Linux の場合: CD ドライブをマウントします。
4. システムで自動実行が使用可能になっている場合は、Rational Application Developer ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。自動実行が使用不可の場合は、ランチパッド・プログラムを開始してください。詳しくは、33 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
5. ランチパッドから Rational Application Developer のインストールを開始します。詳しくは、34 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

IBM Installation Manager がワークステーション上に検出されない場合は、それをインストールするようプロンプトが表示され、インストール・ウィザードが開始します。ウィザードのスクリーン内の指示に従って、Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、29 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。

Installation Manager のインストールが完了したら、あるいは、すでにコンピューター上にある場合は、Installation Manager が開始し、自動的に「パッケージのインストール」ウィザードが開始します。

6. 「パッケージのインストール」ウィザードのスクリーン内の説明に従って、インストールを完了します。詳しくは、35 ページの『IBM Installation Manager GUI を使用した IBM Rational Application Developer のインストール』を参照してください。
7. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Application Developer のトライアル・ライセンスが含まれています。引き続き製品にアクセスできるように、ライセンスを構成する必要があります。詳しくは、55 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。

- Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、61 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。
- Rational Application Developer と一緒に組み込まれているオプション・ソフトウェアをインストールします。詳しくは、71 ページの『オプション・ソフトウェアのインストール』を参照してください。

---

## ワークステーション上の電子イメージからの Rational Application Developer のインストール: タスクの概要

電子インストール・イメージから Rational Application Developer をインストールする場合の一般的な手順は、次のとおりです。

- IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要があるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なスペースが、ワークステーションにあることを確認してください。3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
- IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、一時ディレクトリーにすべてダウンロードします。
- ダウンロードしたファイルからインストール・イメージを抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、19 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。
- 続けて、下記の『電子イメージからのインストール』のステップを実行します。

### 電子イメージからのインストール

- 21 ページの『プリインストール・タスク』にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
- ランチパッド・プログラムを開始します。詳しくは、33 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
- ランチパッドから Rational Application Developer のインストールを開始します。詳しくは、34 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

IBM Installation Manager がワークステーション上に検出されない場合は、それをインストールするようプロンプトが表示され、インストール・ウィザードが開始します。ウィザードのスクリーン内の指示に従って、Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、29 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。

Installation Manager のインストールが完了したら、あるいは、すでにシステム上にある場合は、Installation Manager が開始し、自動的に「パッケージのインストール」ウィザードが開始します。

**注:** 製品インストールが完了する前に Installation Manager を終了した場合、ランチパッドから Installation Manager を再起動する必要があります。  
Installation Manager を直接開始した場合は、必要なインストール・リポジトリーによる事前設定は行われません。

4. 「パッケージのインストール」ウィザードのスクリーン内の説明に従って、インストールを完了します。詳しくは、35 ページの『IBM Installation Manager GUI を使用した IBM Rational Application Developer のインストール』を参照してください。
5. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Application Developer のトライアル・ライセンスが含まれています。引き続き製品にアクセスできるように、ライセンスを構成する必要があります。詳しくは、55 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。
6. Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、61 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。
7. Rational Application Developer と一緒に組み込まれているオプション・ソフトウェアをインストールします。詳しくは、71 ページの『オプション・ソフトウェアのインストール』を参照してください。

---

## 共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Application Developer のインストール: タスクの概要

このシナリオでは、お客様は共用ドライブ上に電子イメージを置いて、社内のユーザーが 1 つのロケーションから Rational Application Developer のインストール・ファイルにアクセスできるようにします。

共用ドライブ上にインストール・イメージを置く人が、以下のステップを実行します。

1. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要があるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なディスク・スペースが、共用ドライブにあることを確認してください。詳しくは、3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、共用ドライブ上の一時ディレクトリーにすべてダウンロードします。
3. インストール・イメージをダウンロードしたファイルから共用ドライブ上のアクセス可能なディレクトリーに抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、19 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。

共用ドライブ上のインストール・ファイルから Rational Application Developer をインストールするには、以下のようにします。

1. インストール・イメージが含まれている共用ドライブの disk1 ディレクトリーに移動します。
2. 24 ページの『電子イメージからのインストール』のステップに従います。

---

## HTTP Web サーバー上のリポジトリーからの Rational Application Developer のインストール: タスクの概要

このシナリオでは、製品パッケージは IBM Installation Manager によって HTTP Web サーバーから取得されます。

以下のステップは、Rational Application Developer パッケージを含むリポジトリが HTTP Web サーバー上に作成されていることを前提としています。

Rational Application Developer パッケージを HTTP サーバー上のリポジトリからインストールするには、以下のようにします。

1. 21 ページの『プリインストール・タスク』 にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. IBM Installation Manager をインストールします。29 ページの『IBM Installation Manager の管理』を参照してください。このシナリオでは、例えば Installation Manager のインストール・ファイルは共用ドライブから入手できます。
3. 「Installation Manager」を開始する。詳しくは、30 ページの『Windows での Installation Manager の開始』を参照してください。
4. Rational Application Developer パッケージが含まれているリポジトリの URL を、Installation Manager のリポジトリとして設定します。14 ページの『Installation Manager のリポジトリ設定』を参照してください。
5. Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードを開始し、「パッケージのインストール」ウィザードのスクリーン内の指示に従って、インストールを完了します。詳しくは、35 ページの『IBM Installation Manager GUI を使用した IBM Rational Application Developer のインストール』を参照してください。
6. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Application Developer のトライアル・ライセンスが含まれています。ライセンスを設定して、引き続きアクセスして製品で作業ができることを確認してください。詳しくは、55 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。
7. Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、61 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。
8. Rational Application Developer と一緒に組み込まれているオプションのソフトウェアをインストールします。詳しくは、71 ページの『オプション・ソフトウェアのインストール』を参照してください。

---

## HTTP Web サーバー上への Rational Application Developer の配置: タスクの概要

HTTP Web サーバー上にあるリポジトリから、インストールのために Rational Application Developer を準備するには、次のようにします。

1. ご使用の HTTP または HTTPS Web サーバーに、製品パッケージを保管するのに十分なディスク・スペースがあることを確認します。3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要のあるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なディスク・スペースが、ワークステーションにあることを確認してください。3 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
3. IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、ワークステーション上の一時ディレクトリにすべてダウンロードします。



4. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージをワークステーション上の別の一時ディレクトリーに抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、19 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。
5. ご使用のプラットフォームに適した補助 CD (または電子イメージ) から、ワークステーションに IBM Packaging Utility をインストールします。
6. Packaging Utility を使用して、Rational Application Developer 製品パッケージをコピーします。
7. Packaging Utility の出力を HTTP または HTTPS Web サーバーにコピーします。
8. IBM Installation Manager のインストール・ファイルを、補助 CD から共有ドライブにコピーします。
9. 社内ユーザーに Installation Manager をインストールするよう指示します。
10. 以前に作成済みの Rational Application Developer 製品パッケージが含まれているリポジトリーの URL をユーザーに提供します。



---

## IBM Installation Manager の管理

---

### Windows への Installation Manager のインストール

IBM Installation Manager は、ランチパッドによってインストールされます。このプロセスについて詳しくは、33 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストール』を参照してください。

Installation Manager を手動でインストールするには、以下のようになります。

1. 1 枚目のインストール・ディスクの `InstallerImager_win32` フォルダから、`setup.exe` を実行します。
2. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
3. 「ご使用条件」ページの使用条件を読み、「使用条件の条項に同意します」を選択して同意します。「次へ」をクリックします。
4. 必要に応じて、「宛先フォルダ」ページの「変更」ボタンをクリックして、インストール場所を変更します。「次へ」をクリックします。
5. 「設定タイプ (Setup Type)」ページで「次へ」をクリックします。
6. 「プログラムのインストール準備ができました (Ready to Install Program)」ページで「インストール」をクリックします。インストールが完了すると、「完了」ページが開きます。
7. 「終了」をクリックします。

---

### Linux への Installation Manager のインストール

IBM Installation Manager は、ランチパッドによってインストールされます。このプロセスについて詳しくは、33 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストール』を参照してください。

Installation Manager を手動でインストールするには、以下のようになります。

1. root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. 1 枚目のインストール・ディスクの `InstallerImager_linux` フォルダから、`setupLinux.bin` を実行します。
3. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
4. 「ご使用条件」ページの使用条件を読み、「使用条件の条項に同意します」を選択して同意します。「次へ」をクリックします。
5. 必要に応じてインストール・ディレクトリー・ロケーションを編集します。「次へ」をクリックします。
6. 情報の要約ページで「インストール」をクリックします。
7. InstallShield ウィザードの「終了」ページで「終了」をクリックします。

---

## Windows での Installation Manager の開始

IBM Installation Manager は、ランチパッド・プログラムから開始してください。こうすると、Installation Manager が、リポジトリ設定を構成し、Rational Application Developer パッケージを選択した状態で起動します。Installation Manager を直接開始した場合は、リポジトリの設定と製品パッケージの選択を手動で行う必要があります。

Installation Manager を手動で開始するには、以下のようにします。

1. タスク バーの「スタート」メニューを開きます。
2. 「すべてのプログラム」 → 「IBM Installation Manager」 → 「IBM Installation Manager」を選択します。

---

## Linux での Installation Manager の開始

IBM Installation Manager は、ランチパッド・プログラムから開始してください。こうすると、Installation Manager が、リポジトリ設定を構成し、Rational Application Developer パッケージを選択した状態で起動します。Installation Manager を直接開始する場合は、リポジトリの設定と製品パッケージの選択を手動で行う必要があります。

Installation Manager を手動で開始するには、以下のようにします。

1. root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. `/opt/IBM/InstallationManager/launcher_shortcut` を実行します。

---

## Windows での Installation Manager のアンインストール

Installation Manager を手動でアンインストールするには、以下のようにします。

1. 1 枚目のインストール・ディスクの `InstallerImager_win32` フォルダから、`setup.exe` を実行します。
2. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
3. 「プログラムの保守 (Program Maintenance)」ページで「除去」ボタンを選択します。「次へ」をクリックします。
4. 「設定タイプ (Setup Type)」ページで「次へ」をクリックします。
5. 「プログラムの除去 (Remove the Program)」ページで「除去」をクリックします。
6. InstallShield ウィザードの「終了」ページで「終了」をクリックします。

注: Installation Manager のアンインストールは、「コントロール パネル」を使用して行うこともできます。「スタート」 → 「設定」 → 「コントロール パネル」の順にクリックし、「プログラムの追加と削除」をダブルクリックします。IBM Installation Manager の項目を選択して、「削除」をクリックします。

---

## Linux での Installation Manager のアンインストール

IBM Installation Manager のアンインストールには、Linux バージョンに組み込まれているパッケージ管理ツールを使用する必要があります。

Linux 上で Installation Manager を手動でアンインストールするには、以下のようになります。

1. root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. Installation Manager のインストール・ディレクトリー (デフォルトでは /opt/IBM/InstallationManager) に移動し、さらに \_uninst に移動します。
3. .uninstaller.bin を実行します。

---

## Installation Manager のサイレント・インストールとアンインストール

IBM Installation Manager はサイレントでインストールおよびアンインストールすることができます。

### Windows での Installation Manager のサイレント・インストール

Windows 環境において、デフォルトのインストール・ロケーションに Installation Manager をサイレントでインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. ディレクトリーを、1 枚目のインストール・ディスクの InstallerImage\_win32 フォルダーに変更します。
2. setup.exe /S /v"/qn" を実行します。

インストール・ロケーションを変更する場合は、/v オプションの内側に INSTALLDIR プロパティを追加します。例えば、setup.exe /S /v"/qn INSTALLDIR="C:\InstallationManager" と指定します。

### Linux での Installation Manager のサイレント・インストール

Linux 環境において、デフォルトのインストール・ロケーションに Installation Manager をサイレントでインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. ディレクトリーを、1 枚目のインストール・ディスクの InstallerImage\_linux フォルダーに変更します。
2. setupLinux.bin -silent -V licenseAccepted=true を実行します。

オプション -V licenseAccepted=true を使用して、Installation Manager のご使用条件を受諾することを指定します。

インストール・ロケーションを変更する場合は、-P installLocation="`<new dir>`" フラグを追加します。例えば、-P setupLinux.bin -silent -P installLocation="/opt/myIM" -V licenseAccepted=true と指定します。

## Windows からの Installation Manager のサイレント・アンインストール

Windows で Installation Manager をサイレントでアンインストールする場合は、次の手順に従ってください。

コマンド・プロンプトでコマンド `msiexec /x {DBD90D51-BD46-41AF-A1F5-B74CEA24365B}` を実行します。

## Linux からの Installation Manager のサイレント・アンインストール

Linux で Installation Manager をサイレントでアンインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. ディレクトリーを、Installation Manager のインストール・ディレクトリーに変更し、さらに `_uninst` ディレクトリーに移動します。
3. コマンド `./uninstaller.bin -silent` を実行します。

---

## ランチパッド・プログラムからのインストール

ランチパッド・プログラムを使用すると、1 つのロケーションでリリース情報の表示およびインストール・プロセスの開始を行うことができます。

次の場合に、ランチパッド・プログラムを使用して、Rational Application Developer のインストールを開始します。

- 製品 CD からのインストール。
- ワークステーション上の電子イメージからのインストール。
- 共有ドライブ上の電子イメージからのインストール。

インストール・プロセスをランチパッド・プログラムから開始すると、IBM Installation Manager は、Rational Application Developer パッケージが含まれているリポジトリのロケーションで事前に構成された状態で起動します。Installation Manager を直接インストールして開始する場合は、手動でリポジトリ設定を行う必要があります。

ランチパッドからインストールするには、以下のようにします。

1. プリインストール・タスクをまだ行っていない場合は、21 ページの『プリインストール・タスク』に記載されているプリインストール・タスクを完了します。
2. ランチパッド・プログラムを開始します。『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
3. Rational Application Developer のインストールを開始します。34 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

「パッケージのインストール」ウィザードのスクリーン内の説明に従って、インストールを完了します。詳しくは、35 ページの『IBM Installation Manager GUI を使用した IBM Rational Application Developer のインストール』を参照してください。

---

## ランチパッド・プログラムの開始

プリインストール・タスクをまだ行っていない場合は、21 ページの『プリインストール・タスク』に記載されているプリインストール・タスクを完了します。

CD からインストールする場合に、ワークステーション上で自動実行が使用可能になっているときは、1 枚目のインストール・ディスクを CD ドライブに挿入すると、Rational Application Developer ランチパッドが自動的に開始します。電子イメージからインストールする場合、もしくは、ワークステーション上で自動実行が未構成な場合は、ランチパッド・プログラムを手動で開始する必要があります。

ランチパッド・プログラムを開始するには、以下のようにします。

1. IBM Rational Application Developer CD を CD ドライブに挿入します。Linux の場合: CD ドライブがマウントされていることを確認します。

2. システムで自動実行が使用可能になっている場合は、IBM Rational Application Developer ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。システムで自動実行が使用不可の場合は、以下のようにします。
  - Windows の場合: CD のルート・ディレクトリーにある launchpad.exe を実行します。
  - Linux の場合: CD のルート・ディレクトリーにある launchpad.sh を実行します。

---

## ランチパッド・プログラムからのインストールの開始

1. ランチパッド・プログラムを開始します。
2. リリース情報をまだ読んでいない場合は、「リリース・ノート (Release notes)」をクリックしてお読みください。
3. インストールの開始準備ができたなら、「**IBM Rational Application Developerのインストール**」をクリックします。
4. プログラム IBM Installation Manager がワークステーションで検出されたかどうかを知らせるメッセージ・ウィンドウが開きます。
  - IBM Installation Manager がシステム上で検出されない場合は、それをインストールしてから作業を続行する必要があることが通知されます。
    - a. 「**OK**」をクリックして、IBM Installation Manager をインストールします。IBM Installation Manager のインストール・ウィザードが起動します。
    - b. ウィザードのスクリーン内の指示に従って、IBM Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、29 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。
    - c. IBM Installation Manager のインストールが正常に完了したら、「**終了**」をクリックしてウィザードを閉じます。
    - d. メッセージが開くのでそれを読み、「**OK**」をクリックします。Installation Manager が開始し、自動的に「パッケージのインストール」ウィザードが開きます。
  - IBM Installation Manager がシステムで検出された場合は、「**OK**」をクリックします。すると、Installation Manager が開始し、自動的に「パッケージのインストール」ウィザードが開きます。
5. 「パッケージのインストール」ウィザードのスクリーン内の説明に従って、インストールを完了します。詳しくは、35 ページの『IBM Installation Manager GUI を使用した IBM Rational Application Developer のインストール』を参照してください。



---

# IBM Installation Manager GUI を使用した IBM Rational Application Developer のインストール

以下のステップでは、IBM Rational Application Developer パッケージの Installation Manager GUI によるインストールについて説明します。

使用するインストール・シナリオによって、Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードが自動的に開始されることがあります（自動的に開始されるのは、例えば、CD からインストールする場合などです）。その他のシナリオでは、ウィザードをユーザーが開始することが必要となります。

1. Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードが自動的に開始されなかった場合は、次の手順で開始します。
  - a. 「Installation Manager」を開始する。
  - b. 「スタート」ページで、「パッケージのインストール」をクリックします。

**注:** Installation Manager の新しいバージョンが検出されると、そのバージョンのインストールの確認を求めるプロンプトが表示されます。これを確認しないと、続行することはできません。「OK」をクリックして先に進みます。Installation Manager は自動的に、新しいバージョンのインストール、停止、再始動、および再開を実行します。

Installation Manager は、始動されると、使用可能なパッケージに対する定義済みリポジトリを検索します。

2. 「パッケージのインストール」ウィザードの「インストール」ページに、Installation Manager が検索したリポジトリ内で検出されたすべてのパッケージがリストされます。2 つのバージョンのパッケージが検出された場合は、最新バージョンまたは推奨バージョンのパッケージのみが表示されます。
  - Installation Manager で検出されたすべてのバージョンのパッケージを表示するには、「すべてのバージョンを表示」をクリックします。
  - 推奨パッケージのみの表示に戻すには、「推奨のみを表示」をクリックします。
3. IBM Rational Application Developer パッケージをクリックすると、「詳細」ペインにその説明が表示されます。
4. IBM Rational Application Developer パッケージに対する更新を検索するには、「更新の検査」をクリックします。

**注:** Installation Manager が定義済みの IBM 更新リポジトリ・ロケーションでインストール済みパッケージを検索するには、「リポジトリ」の設定ページで「インストールと更新を行っている間にリンクされたリポジトリをサーチします」設定を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。インターネットへのアクセスも必要です。

Installation Manager は、製品パッケージの定義済みの IBM 更新リポジトリで更新を検索します。リポジトリ・ロケーションを設定しておけば、そこも検索します。プログレス・バーに検索状況が表示されます。基本製品パッケージのインストールと同時に更新もインストールできます。

5. IBM Rational Application Developer パッケージの更新が検出されると、「パッケージのインストール」ページの各製品の下に「インストール・パッケージ」リストにそれらが表示されます。デフォルトでは、推奨される更新のみが表示されます。
  - 使用可能なパッケージ用に検出された更新をすべて表示するには、「すべてのバージョンを表示」をクリックします。
  - 「詳細」でパッケージの説明を表示するには、パッケージ名をクリックします。README ファイルやリリース・ノートなど、パッケージに関する追加情報が入手可能な場合は、説明本文の最後に「詳細情報」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、ブラウザに追加情報が表示されます。インストールするパッケージを完全に理解するためには、事前にすべての情報を検討しておくようにしてください。
6. インストールする IBM Rational Application Developer パッケージおよびそのパッケージに対する更新を選択します。依存関係のある更新は、自動でまとめて選択およびクリアされます。「次へ」をクリックして続けます。

**注:** 一度に複数のパッケージをインストールする場合は、すべてのパッケージが同じパッケージ・グループにインストールされます。

7. 「ライセンス」ページで、選択したパッケージのご使用条件を読みます。複数のパッケージをインストールするよう選択した場合は、パッケージごとにご使用条件があります。「ライセンス」ページの左側で、各パッケージのバージョンをクリックして、ご使用条件を表示してください。インストールするために選択したパッケージのバージョン (例えば、基本パッケージおよび更新) は、パッケージ名の下にリストされます。
  - a. ご使用条件のすべての条項に同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」をクリックします。
  - b. 「次へ」をクリックして続けます。
8. 「ロケーション」ページで、「共用リソース・ディレクトリー」フィールドに共用リソース・ディレクトリー のパスを入力するか、デフォルト・パスを受け入れます。共用リソース・ディレクトリーには、1 つ以上のパッケージ・グループが共用できるリソースが含まれています。「次へ」をクリックして続けます。

**重要:** (*Rational Application Developer* バージョン 7.0.0.2 以降のみ) Windows Vista 上で、初期インストールの実行とバージョン 7.0.0.2 への更新を同時に行っている場合、管理者特権を持たないユーザーが *Rational Application Developer* で作業する際には、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files) 内のディレクトリーを選択しないでください。

デフォルト・パスは次のとおりです:

- Windows の場合: C:\Program Files\IBM\SDP70Shared
- Linux の場合: /opt/IBM/SDP70Shared

**重要:** 共用リソース・ディレクトリーは、パッケージの初回インストール時のみ指定できます。将来のパッケージの共用リソースに十分なスペースを確保するために、これには一番大きいディスクを使用してください。

すべてのパッケージをアンインストールするまで、ディレクトリー・ロケーションを変更することはできません。

9. 「ロケーション」 ページで、IBM Rational Application Developer パッケージをインストールするために既存のパッケージ・グループ を選択するか、新規パッケージ・グループを作成します。パッケージ・グループは、パッケージが同じグループ内の他のパッケージとリソースを共有するディレクトリーを表します。新しいパッケージ・グループを作成するには、以下のようになります。
  - a. 「**新規パッケージ・グループの作成 (Create a new package group)**」 をクリックします。
  - b. パッケージ・グループのインストール・ディレクトリーのパスを入力します。 パッケージ・グループの名前が自動的に作成されます。

**重要:** (Rational Application Developer バージョン 7.0.0.2 以降のみ)

Windows Vista 上で、初期インストールの実行とバージョン 7.0.0.2 への更新を同時に行っている場合、管理者特権を持たないユーザーが Rational Application Developer で作業する際には、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files) 内のディレクトリーを選択しないでください。

デフォルト・パスは次のとおりです:

- Windows の場合: C:\Program Files\IBM\SDP70
- Linux の場合: /opt/IBM/SDP70

- c. 「次へ」 をクリックして続けます。
10. 次の「ロケーション」 ページで、インストールするパッケージに機能を追加して、システムにすでにインストールされている既存の Eclipse IDE を拡張することができます。このオプションを選択するには、eclipse.org から提供される最新の更新が適用された Eclipse バージョン 3.2.1 を使用している必要があります。
  - 既存の Eclipse IDE を拡張しない場合は、「次へ」 をクリックして続けます。
  - 既存の Eclipse IDE を拡張するには、以下のようになります。
    - a. 「**既存の Eclipse を拡張 (Extend an existing Eclipse)**」 を選択します。
    - b. 「**Eclipse IDE**」 フィールドに eclipse 実行可能ファイル (eclipse.exe または eclipse.bin) が含まれているフォルダーのロケーションを入力するか、またはナビゲートします。Installation Manager は、Eclipse IDE のバージョンが、インストールするパッケージに有効であるかどうか検査します。「**Eclipse IDE JVM**」 フィールドに、指定した IDE の Java 仮想マシン (JVM) が表示されます。
    - c. 「次へ」 をクリックして続けます。
11. 「フィーチャー」 ページの「言語」 で、パッケージ・グループの言語を選択します。IBM Rational Application Developer パッケージのユーザー・インターフェースおよびドキュメンテーションについて、対応する各国語翻訳がインストールされます。この選択は、このパッケージ・グループにインストールされたすべてのパッケージに適用されることに注意してください。
12. 次の「フィーチャー」 ページで、インストールするパッケージ・フィーチャーを選択します。

- a. オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示 (Show Dependencies)**」を選択します。
  - b. オプション: フィーチャーをクリックすると、「**詳細**」の下に簡単な説明が表示されます。
  - c. パッケージのフィーチャーを選択またはクリアにします。Installation Manager は、他のフィーチャーとの依存関係を自動的に強制し、ダウンロード・サイズおよびインストールに必要なディスク・スペース所要量を更新して表示します。
  - d. フィーチャーの選択が終了したら、「**次へ**」をクリックして続けます。
13. IBM Rational Application Developer パッケージをインストールする前に「**要約**」ページで選択項目を検討します。前のページで行った選択を変更したい場合は、「**戻る**」をクリックして変更を行います。選択がそのままであれば、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。プログレス・バーにインストールの完了パーセントが表示されます。
  14. インストール・プロセスが完了したら、プロセスが正常に行われたことを確認するメッセージが表示されます。
    - a. 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、新規ウィンドウで現行セッションのインストール・ログ・ファイルを開きます。続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
    - b. 「**パッケージのインストール**」ウィザードで、終了時に IBM Rational Application Developer を開始するかどうかを選択します。
    - c. 「**終了**」をクリックして、選択したパッケージを起動します。「パッケージのインストール」ウィザードが閉じ、Installation Manager の「**始動**」ページに戻ります。

---

## サイレント・インストール

Rational Application Developer 製品パッケージは、Installation Manager をサイレント・インストール・モードを実行してインストールできます。Installation Manager をサイレント・モードで実行する場合は、ユーザー・インターフェースは使用できません。代わりに、Installation Manager は応答ファイルを使用して、製品パッケージのインストールに必要なコマンドを入力します。

Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、バッチ処理でスクリプトを通じて製品パッケージのインストール、更新、変更、およびアンインストールを行えるため便利です。

Rational Application Developer パッケージをサイレント・インストールする前に、Installation Manager をインストールする必要があることに注意してください。Installation Manager のインストールについては、29 ページの『IBM Installation Manager の管理』を参照してください。

サイレント・インストールには、必須のメインタスクが 2 つあります。

1. 応答ファイルの作成。
2. Installation Manager のサイレント・インストール・モードでの実行。

---

### 応答ファイルの作成

Installation Manager で Rational Application Developer 製品パッケージをインストールするときのアクションを記録して、応答ファイルを作成することができます。応答ファイルを記録すると、Installation Manager の GUI で選択した項目がすべて XML ファイルに保管されます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイルを使用して、パッケージが含まれているリポジトリの検索、インストールするフィーチャーの選択などを行います。

インストール (またはアンインストール) 用の応答ファイルを記録するには、以下のようになります。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリーの eclipse サブディレクトリーに移動します。例:
  - Windows の場合: `cd C:\Program Files\IBM\Installation Manager\eclipse`
  - Linux の場合: `cd opt/IBM/InstallationManager/eclipse`
2. コマンド行で次のコマンドを入力して、Installation Manager を開始し、応答ファイルおよび (オプションで) ログ・ファイルのファイル名およびロケーションについては独自のものに置換します。
  - Windows の場合: `launcher.bat -record <応答ファイルのパスおよび名前>.xml -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>.xml`。例: `launcher.bat -record c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\record_log.xml`

- Linux の場合: `launcher.sh -record <応答ファイルの名前 >.xml -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>.xml`。例: `launcher.sh -record /root/mylog/responsefile.xml -log /root/mylog/record_log.xml`

注: 入力するファイル・パスが存在することを確認してください。Installation Manager では、応答ファイルとログ・ファイル用のディレクトリーは作成されません。

3. 「パッケージのインストール」ウィザードのスクリーン内の説明に従って、使用するインストールを選択し、「要約」ページが表示されたら停止します。詳しくは、35 ページの『IBM Installation Manager GUI を使用した IBM Rational Application Developer のインストール』を参照してください。
4. 「インストール」をクリックし、インストール・プロセスが開始したら「キャンセル」をクリックします。
5. 「終了」をクリックして Installation Manager を閉じます。

コマンドで指定したロケーションに XML 応答ファイルが作成されます。

## サイレント・インストール・モードでの Installation Manager の実行

コマンド行から Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行することができます。

サイレント・モードでの実行方法に関するその他の資料については、Installation Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。(例えば、認証 (ユーザー ID とパスワード) を必要とするリポジトリからのサイレント・インストールなど)。

`-silent` 引数を Installation Manager の開始コマンド `launcher.bat` (Windows) または `launcher.sh` (Linux) に付加して、Installation Manager をサイレント・モードで実行します。

- Windows の場合: `launcher.bat -silent [引数]`
- Linux の場合: `launcher.sh -nosplash -silent [引数]`

次の表は、サイレント・インストール・コマンドで使用される引数を示したものです。

引数	説明
<code>-input</code>	Installation Manager への入力として XML 応答ファイルを指定します。応答ファイルには、Installation Manager が実行するコマンドが含まれています。
<code>-log</code>	(オプション) サイレント・インストールの結果を記録するログ・ファイルを指定します。ログ・ファイルは XML ファイルです。

Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行するには、以下のようになります。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリーの `eclipse` サブディレクトリーに移動します。例:

- Windows の場合: `cd C:\Program Files\IBM\Installation Manager\eclipse`
  - Linux の場合: `cd opt/IBM/InstallationManager/eclipse`
2. 以下のコマンドを入力して実行します。応答ファイルおよびログ・ファイル (オプション) の個所には、ご使用のロケーションを指定してください。
    - Windows の場合: `launcher.bat -silent -input <応答ファイルのパスおよび名前> -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `launcher.bat -silent -input c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\silent_install_log.xml`
    - Linux の場合: `launcher.sh -nosplash -silent<応答ファイルの名前 > -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例: `launcher.sh -nosplash -silent -input /root/mylog/responsefile.xml -log /root/mylog/silent_install_log.xml`

Installation Manager がサイレント・インストール・モードで実行されます。Installation Manager は、応答ファイルを読み取り、指定したディレクトリーにログ・ファイルを書き込みます。サイレント・インストール・モードで実行する場合、応答ファイルは必須ですが、ログ・ファイルはオプションです。この実行の結果、成功時は状況 ゼロ、失敗時はゼロ以外の数値が返されます。

## すべての使用可能な製品の検索とサイレント・インストール

すべての使用可能な製品に対する更新をサイレントで検索してインストールすることができます。

すべての使用可能な製品を検索してサイレントでインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリーの eclipse サブディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを入力して実行します。応答ファイルおよびログ・ファイル (オプション) の個所には、ご使用のロケーションを指定してください。
  - Windows の場合: `launcher.bat -silent -installAll`
  - Linux の場合: `launcher.sh -silent -installAll`

Installation Manager に認識されているすべての使用可能な製品がインストールされます。

## 現在インストールされているすべての製品に対する更新のサイレント・インストール

現在インストールされているすべての製品に対する更新をサイレントで検索してインストールすることができます。

すべての使用可能な製品に対する更新を検索してサイレントでインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリーの eclipse サブディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを入力して実行します。応答ファイルおよびログ・ファイル (オプション) の個所には、ご使用のロケーションを指定してください。
  - Windows の場合: `launcher.bat -silent -updateAll`
  - Linux の場合: `launcher.sh -silent -updateAll`

Installation Manager で認識されているすべての使用可能な製品の更新がインストールされます。

---

## 応答ファイルのコマンド

Installation Manager のサイレント・インストール機能を使用する場合は、Installation Manager で実行する必要のあるすべてのコマンドを含む応答ファイルを作成する必要があります。これを行う際に推奨されるのは、IBM Rational Application Developer パッケージのインストール時のアクションを記録することによって、応答ファイルを作成する、という方法です。ただし、応答ファイルは手動で作成したり編集したりすることができます。

応答ファイルのコマンドには、以下の 2 つのカテゴリがあります。

- 「設定」コマンドは、「ファイル」→「設定」と選択したときに、Installation Manager で表示される設定 (リポジトリ・ロケーション情報など) を行う場合に使用します。
- サイレント・インストール・コマンドは、Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードをエミュレートするために使用します。

## サイレント・インストール設定コマンド

通常は「設定」ウィンドウを使用して設定を指定しますが、サイレント・インストール中に使用する応答ファイルに設定 (キーとして識別されます) を指定することもできます。

**注:** 応答ファイルには、複数の設定を指定できます。

応答ファイルに設定を定義する場合、使用する XML コードは次の例のようになります。

```
<preference>
  name = "the key of the preference"
  value = "the value of the preference to be set"
</preference>
```

次の表を使用して、サイレント・インストール設定用のキーとそれに関連した値を識別します。



キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences.logLocation	Installation Manager のログ・ファイルのロケーションを指定します。	<b>重要:</b> このキーはオプションで、テストとデバッグ用に設計されています。ログ・ファイルのロケーションが未指定である場合、Installation Manager のサイレント・インストールと UIバージョンでは両方とも同じロケーションが使用されます。
com.ibm.cic.license.policy.location	リモート・ライセンス・ポリシー・ファイルを置く場所を定義する URL を指定します。	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyEnabled	True または False	「False」がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyUseSocks	True または False	「False」がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.SOCKS.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.SOCKS.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyEnabled	True または False	「False」がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyPort	ポート番号	

キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences.eclipseCache	c:\IBM\common (Windows)  /opt/IBM/common (Linux) <b>注:</b> 上記のパスは、この設定のデフォルト値です。一般に、インストール・パッケージにはこの設定に対し独自の値が用意されています。	この場所は、すでにパッケージをインストール済みの場合は変更できません。
com.ibm.cic.agent.core.pref.offering.service.repositories. areUsed	True または False	使用不可にするには、この設定を「False」に変更します。 「True」の場合は、製品をインストールまたは更新するときに、リンクされているすべてのリポジトリが検索されます。
com.ibm.cic.common.core.preferences. preserveDownloadedArtifacts	True または False	使用不可にするには、この設定を「False」に変更します。 「True」の場合は、前のバージョンへのパッケージのロールバックに必要なファイルがシステムに格納されます。「False」の場合は、これらのファイルは格納されません。これらのファイルを格納しない場合、オリジナルのリポジトリまたはメディアに接続しなければロールバックすることはできません。

## サイレント・インストール・コマンド

この表を参照すると、サイレント・インストール中に使用する応答ファイル・コマンドについてさらに詳細がわかります。

応答ファイルのコマンド	説明
<pre> プロファイル &lt;profile id="プロファイル (パッケージ・グループ) ID" installLocation="the install location of the profile"&gt; &lt;data key="キー 1" value="値 1"/&gt; &lt;data key="キー 2" value="値 2"/&gt;  &lt;/profile&gt; </pre>	<p>このコマンドは、パッケージ・グループ (またはインストール・ロケーション) を作成する場合に使用します。指定したパッケージ・グループがすでに存在する場合は、このコマンドの効果はありません。現時点では、プロファイルを作成すると、サイレント・インストールでは以下の 2 つのインストール・コンテキストも作成されます。1 つは Eclipse 向けで、もう 1 つは native 向けです。プロファイルは、インストール・ロケーションです。</p> <p>プロファイルのプロパティを設定するには、&lt;data&gt; 要素を使用します。</p> <p>現在サポートされているキーおよび関連する値は次のリストのとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• eclipseLocation キーは、 c:¥myeclipse¥eclipse など、既存の Eclipse ロケーション値を指定します。</li> <li>• cic.selector.nl キーは、zh、ja、en など、自然言語 (NL) のロケール選択を指定します。</li> </ul> <p><b>注:</b> NL 値が複数ある場合はコンマで区切ります。</p> <p>現在サポートされている言語コードは次のリストのとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 英語 (en)</li> <li>• フランス語 (fr)</li> <li>• イタリア語 (it)</li> <li>• 中国語 (簡体字) (zh)</li> <li>• ロシア語 (ru)</li> <li>• 中国語 (繁体字) (台湾) (zh_TW)</li> <li>• 中国語 (繁体字) (香港) (zh_HK)</li> <li>• ドイツ語 (de)</li> <li>• 日本語 (ja)</li> <li>• ポーランド語 (pl)</li> <li>• スペイン語 (es)</li> <li>• チェコ語 (cs)</li> <li>• ハンガリー語 (hu)</li> <li>• 韓国語 (ko)</li> <li>• ポルトガル語 (pt_BR)</li> </ul>

応答ファイルのコマンド	説明
<pre> リポジトリ &lt;server&gt; &lt;repository location="http://example/ repository/"&gt; &lt;repository location="file:/C:/ repository/"&gt; &lt;!--add more repositories below--&gt; &lt;...&gt; &lt;/server&gt; </pre>	<p>このコマンドは、サイレント・インストール中に使用するリポジトリを指定する場合に使用します。リモート・リポジトリを指定する場合は URL または UNC パスを使用し、ローカル・リポジトリを指定する場合はディレクトリー・パスを使用します。</p>
<pre> インストール &lt;install&gt; &lt;offering profile= "プロファイル ID" features= "フィーチャー ID" id= "offering id" version= "offering version"&gt;&lt;/offering&gt;  &lt;!--add more offerings below&gt; &lt;...&gt;  &lt;/install&gt; </pre>	<p>このコマンドを使用して、インストールするインストール・パッケージを指定します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイル、またはプロファイル設定コマンドで作成されたプロファイルと一致する必要があります。</p> <p>フィーチャー ID は、コンマで区切られたリスト (「feature1, feature2」など) によって、オプションで指定できます。フィーチャー ID が指定されていない場合は、指定の製品のすべてのデフォルト・フィーチャーがインストールされます。</p> <p><b>注:</b> 必須のフィーチャーは、コンマで区切られたリストで明示的に指定されていない場合であっても、インストール用に含まれます。</p>
<pre> &lt;install modify="true"&gt; または &lt;uninstall modify="true"&gt; (オプション属性)  &lt;uninstall modify="true"&gt; &lt;offering profile="プロファイル ID" id="ID" version="バージョン" features="-"/&gt; &lt;/uninstall&gt; </pre>	<p>既存のインストールを変更することを指示する場合は、install コマンドおよび uninstall コマンドの &lt;install modify="true"&gt; 属性を使用します。この属性が true に設定されていない場合、値はデフォルトで false に設定されます。変更操作を、追加の言語パックをインストールすることだけを目的に行う場合、製品フィーチャー ID リストでハイフン「-」を使用して、新しいフィーチャーを追加するわけではないことを指示する必要があります。</p> <p><b>重要:</b> 例で指定しているように、「modify=true」とハイフン“-”から成るフィーチャー・リストを指定してください。そうしないと、install コマンドでは製品のデフォルト・フィーチャーがインストールされ、uninstall コマンドではすべてのフィーチャーが除去されます。</p>

応答ファイルのコマンド	説明
<p><b>アンインストール</b></p> <pre>&lt;uninstall&gt; &lt;offering profile= "プロファイル ID" features= "フィーチャー ID" id= "offering id" version= "offering version"&gt;&lt;/offering&gt;  &lt;!--add more offerings below&gt; &lt;...&gt;  &lt;/uninstall&gt;</pre>	<p>このコマンドは、アンインストールするパッケージを指定する場合に使用します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイル、またはプロファイル・コマンドで指定されたプロファイルに一致している必要があります。さらに、フィーチャー ID が指定されていない場合は、指定の製品のすべてのフィーチャーがアンインストールされます。製品 ID が指定されていない場合は、指定のプロファイル内のすべてのインストール済み製品がアンインストールされます。</p>
<p><b>ロールバック</b></p> <pre>&lt;rollback&gt; &lt;offering profile= "プロファイル ID" id= "製品 ID" version= "製品バージョン"&gt; &lt;/offering&gt;  &lt;!--add more offerings below &lt;...&gt;  &lt;/rollback&gt;</pre>	<p>このコマンドは、指定したオフリングを、指定したプロファイルに現在インストールされているバージョンからロールバックする場合に使用します。 rollback コマンドでフィーチャーを指定することはできません。</p>
<p><b>すべてインストール</b></p> <pre>&lt;installALL/&gt;</pre> <p><b>注:</b> このコマンドは、次のコマンドを使用した場合と同等です。</p> <pre>-silent -installAll .</pre>	<p>このコマンドは、すべての使用可能なパッケージをサイレントで検索し、インストールする場合に使用します。</p>
<p><b>すべて更新</b></p> <pre>&lt;updateALL/&gt;</pre> <p><b>注:</b> このコマンドは、次のコマンドを使用した場合と同等です。</p> <pre>-silent -updateAll .</pre>	<p>このコマンドは、すべての使用可能なパッケージをサイレントで検索し、更新する場合に使用します。</p>

応答ファイルのコマンド	説明
<p><b>ライセンス</b></p> <pre>&lt;license policyFile="policy file location"/&gt;</pre> <p>例:</p> <pre>&lt;license policyFile="c:%mylicense.opt"/&gt;</pre>	<p>このコマンドは、レコード・モードで Installation Manager を始動してからライセンス・ウィザードを開始することで、license コマンドを入れる応答ファイルを生成する場合に使用します。</p> <p>レコード・モード時に、ライセンス管理ウィザードでフレックス・オプションを設定すると、設定されたオプションは、生成された応答ファイルと同じディレクトリーにある「license.opt」という名前のライセンス・ポリシー・ファイルに記録されます。応答ファイルには、そのポリシー・ファイルを参照する license コマンドが入ります。</p>
<p><b>ウィザード</b></p> <pre>&lt;launcher -mode wizard -input &lt; response file &gt;</pre>	<p>このコマンドは、UI モードで Installation Manager を始動する場合に使用します。UI モードでは、インストール・ウィザードまたはアンインストール・ウィザードのいずれかで、Installation Manager を始動します。ただし、この場合、応答ファイルには preference コマンドと install コマンド、または preference コマンドと uninstall コマンドしか入れることができません。Installation Manager を UI モードで実行する場合は、同じ応答ファイルに install コマンドと uninstall コマンドを一緒に入れることはできません。</p>

## 参照: サンプル応答ファイル

XML ベースの応答ファイルを使用すると、サイレント・インストール設定、リポジトリーのロケーション、インストール用プロファイルなどの事前定義情報を指定できます。応答ファイルは、インストール・パッケージをサイレントでインストールし、インストール・パッケージのロケーションと設定を標準化するチームや会社に役に立ちます。

#### サンプル応答ファイル

```
<agent-input >

<!-- add preferences -->
<preference name="com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyEnabled"
value="c:/temp"/>

<!-- create the profile if it doesn't exist yet -->
<profile id="my_profile" installLocation="c:/temp/my_profile"></profile>

<server>
<repository location=
"http://a.site.com/local/products/sample/20060615_1542/repository/"></repository>
</server>
<install>
<offering profile="my_profile" features="core" id="ies"
version="3.2.0.20060615">
</offering>
</install>
</agent-input>
```

## サイレント・インストール・ログ・ファイル

サイレント・インストール・ログ・ファイルを使用すると、サイレント・インストール・セッションの結果を検査できます。

サイレント・インストール機能によって、XML ベースのログ・ファイルが作成されます。このログ・ファイルには、サイレント・インストールを実行した結果が記録されます。これは、`-log <ログ・ファイル・パス>.xml` を使用して、ログ・ファイル・パスが指定されている場合です。サイレント・インストール・セッションが正常に行われた場合、ログ・ファイルには、`<result> </result>` のルート要素のみが含まれます。しかし、インストール中にエラーが発生した場合は、以下のようなエラー要素が、メッセージとともにサイレント・インストール・ログ・ファイルに記録されます。

```
<result>
<error> Cannot find profile: profile id</error>
<error> some other errors</error>
</result>
```

詳細な分析については、`Installation Manager` データ域に生成されたログを参照してください。設定コマンドを使用することにより、選択したロケーションにデータ域をオプションで設定できます (応答ファイルのトピックを参照)。



---

## IBM Packaging Utility

IBM Packaging Utility ソフトウェアを使用すると、製品パッケージをリポジトリにコピーできます。リポジトリは、HTTP または HTTPS を介して使用可能な Web サーバーに置くことができます。

Packaging Utility ソフトウェアは、Rational Application Developer に同梱されている、各プラットフォーム (Windows および Linux) 用の補助 CD にあります。Rational Application Developer パッケージを含むリポジトリを HTTP または HTTPS 上で使用可能な Web サーバーに置く場合は、Packaging Utility を使用して、Rational Application Developer 製品パッケージをリポジトリにコピーする必要があります。

このユーティリティーを使用して、以下のタスクを実行します。

- 製品パッケージ用新規リポジトリの生成。
- 新規リポジトリへの製品パッケージのコピー。複数の製品パッケージを 1 つのリポジトリにコピーできます。したがって、組織内に共通のロケーションを作成し、そこから IBM Installation Manager を使用して製品をインストールできます。
- リポジトリからの製品パッケージの削除。

Packaging Utility の使用法について詳しくは、このツールのオンライン・ヘルプを参照してください。

---

## Packaging Utility のインストール

IBM Packaging Utility を使用して Rational Application Developer 製品パッケージをコピーするには、事前に補助 CD からこのユーティリティーをインストールしておく必要があります。

次のステップに従って、IBM Packaging Utility ソフトウェアを補助 CD からインストールしてください。

1. 補助 CD からインストールを開始します。
  - Windows の場合: 補助 CD の Aux\_CD\_Win¥PackagingUtility ディレクトリに移動し、install\_win32.exe を実行します。
  - Linux の場合: 補助 CD の Aux\_CD\_Lin/PackagingUtility ディレクトリに移動し、install\_linux.bin を実行します。
2. IBM Installation Manager がワークステーション上に検出されない場合は、それをインストールするようプロンプトが表示され、インストール・ウィザードが開始します。ウィザードのスクリーン内の指示に従って、Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、29 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。
3. Installation Manager のインストールが完了したら、あるいは、すでにコンピューター上にある場合は、Installation Manager が開始し、自動的に「パッケージのインストール」ウィザードが開始します。

4. 「パッケージのインストール」ウィザードのスクリーン内の説明に従って、インストールを完了します。

---

## Packaging Utility を使用した HTTP サーバーへの製品パッケージのコピ

---

HTTP または HTTPS サーバー上にリポジトリを作成する場合は、Packaging Utility を使用して、Rational Application Developer の製品パッケージをコピーする必要があります。

この方法では、Rational Application Developer インストール・イメージと一緒に組み込まれているオプション・ソフトウェアはコピーされないことに注意してください。IBM Installation Manager を使用してインストールされる Rational Application Developer ファイルしかコピーされません。

また、Packaging Utility を使用すると、複数の製品パッケージを 1 つのリポジトリ・ロケーションにまとめることができます。詳しくは、Packaging Utility のオンライン・ヘルプを参照してください。

Packaging Utility を使用して製品パッケージをコピーするには、以下のようになります。

1. CD イメージからコピーする場合は、以下のタスクを実行します。
  - a. 1 枚目のインストール CD を CD ドライブに挿入します。
  - b. Linux の場合: CD ドライブをマウントします。
  - c. システムで自動実行が使用可能になっている場合は、Rational Application Developer ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。ランチパッド・プログラムを閉じます。
2. Packaging Utility を開始します。
3. ユーティリティのメインページで、「製品パッケージのコピー」をクリックします。「前提条件」ページが開き、以下の 2 つのオプションが表示されます。
  - **IBM Web から製品パッケージをダウンロードします**
  - **他のソースから製品パッケージを取得します**
4. 「**IBM Web から製品パッケージをダウンロードします**」をクリックします。

**注:** すでにアクセス可能なリポジトリを定義している場合は、「**他のソースから製品パッケージを取得します**」オプションを使用できます。

5. 「次へ」をクリックして、「ソース」ページに進みます。選択する製品パッケージが無い場合は、製品パッケージが含まれているリポジトリを開く必要があります。
6. リポジトリを開くには、「**リポジトリを開く**」ボタンをクリックします。「リポジトリを開く」ウィンドウが開きます。

**注:** リポジトリは、ファイル・システム内のディレクトリへのパス、1 枚目の製品 CD が含まれているディスク・ドライブ、またはサーバー上のディレクトリの URL です。

7. リポジトリ・ロケーションを定義するには、リポジトリ・ロケーションの「参照」ボタンをクリックし、リポジトリ・ロケーションにナビゲートして選択します。リポジトリ・ロケーションは、電子ディスク・イメージが含まれている「共通ルート・ディレクトリー」、または 1 枚目の製品インストール CD が含まれているドライブになります。例えば、Rational Application Developer ファイル (disk1、disk2 など) が C:\My product\unzip にある場合は、このロケーションをリポジトリとして定義します。
8. 「OK」をクリックしてリポジトリ・ロケーションを定義し、「リポジトリ・ディレクトリーの参照」ウィンドウを閉じます。
9. 「宛先」ページで、「参照」ボタンをクリックし、製品の保管先として、既存のリポジトリ・ディレクトリーを選択するか、または新規フォルダーを作成します。
10. 選択した製品パッケージおよびフィックス用のリポジトリを指定したら、「OK」をクリックして「ディレクトリーを参照」ウィンドウを閉じます。定義したファイル・パスが、「宛先」ページの「ディレクトリー」フィールドにリストされます。
11. 「次へ」をクリックして、「要約」ページに進みます。「要約」ページに、宛先リポジトリにコピーされる選択済み製品パッケージが表示されます。また、このページには、コピーに必要なストレージ・スペースの量およびドライブ上で使用可能なスペースの量もリストされます。
12. 「コピー」をクリックして、選択済み製品パッケージを宛先リポジトリにコピーします。ウィザードの下部に、コピー・プロセスにあとどのくらいの時間がかかるかを示すステータス・バーが表示されます。コピー・プロセスが終了すると、「完了」ページが開き、正常にコピーされた製品パッケージがすべて表示されます。
13. 「終了」をクリックして、Packaging Utility のメインページに戻ります。

Packaging Utility を使用して Rational Application Developer インストール・ファイルをリポジトリにコピーしました。これで、Web サーバー上にリポジトリを置き、HTTP 上で使用可能なディレクトリーおよびファイルを作成できます。(リポジトリは、UNC ドライブにも置くことができます。)



---

## ライセンスの管理

インストールした IBM ソフトウェアおよびカスタマイズしたパッケージのライセンス交付は、「ライセンスの管理」ウィザードを使用して管理されます。「ライセンスの管理」ウィザードには、インストール済みの各パッケージのライセンス情報が表示されます。

バージョン 7.0 以降の Rational 製品の一部については、インストール後 30 日または 60 日で試用ライセンスの有効期限が切れます。有効期限後に引き続き使用するには、製品をアクティブにする必要があります。

「ライセンスの管理」ウィザードを使用して、プロダクト・アクティベーション・キットをインポートすることで、本製品の試用バージョンを、ライセンス交付を受けたバージョンにアップグレードできます。トライアル・ライセンスまたはパーマネント・ライセンスを持つ本製品に対し、フローティング・ライセンスの適用を有効にして、ライセンス・サーバーのフローティング・ライセンス・キーを使用することもできます。

ご使用の Rational 製品のライセンス管理に関する詳細については、次を参照してください。

- Rational 製品のアクティベーションに関する技術情報: <http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21250404>
- Rational のライセンス交付に関するサポート・ページ: <http://www-306.ibm.com/software/rational/support/licensing/>

---

## ライセンス

IBM Rational ソフトウェア製品の購入者として、許可ユーザー・ライセンス、許可ユーザー期限付使用权 (FTL)、およびフローティング・ライセンスの 3 つのタイプの製品ライセンスの中から選択することができます。どのタイプのライセンスが組織に最適であるかは、製品を使用する人数、アクセス頻度、ソフトウェア購入の方針などによって異なります。

### 許可ユーザー・ライセンス

IBM Rational 許可ユーザー・ライセンスは、1 人の特定の個人に対して Rational ソフトウェア製品の使用を許可します。購入者は、製品にアクセスする個々のユーザーごとに、任意の方法で許可ユーザー・ライセンスを入手する必要があります。許可ユーザー・ライセンスの再割り当ては、割り当てた元のユーザーを購入者が長期間または永久に置き換える場合を除いて、許可されません。

例えば、許可ユーザー・ライセンスを 1 つ購入した場合、そのライセンスをある特定の個人に割り当てることができます。割り当てられた個人は、Rational ソフトウェア製品を使用することができます。許可ユーザー・ライセンスでは、いかなる場合も (ライセンス交付を受けた個人が製品を使用中でない場合でも) その製品を使用する権利を他者に与えることはありません。

## 許可ユーザー期限付使用权

IBM Rational 許可ユーザー期限付使用权 (FTL) は、1 人の特定の個人に対して特定期間 Rational ソフトウェア製品の使用を許可します。購入者は、製品にアクセスする個々のユーザーごとに、任意の方法で許可ユーザー FTL を入手する必要があります。許可ユーザー FTL の再割り当ては、割り当てた元のユーザーを購入者が長期間または永久に置き換える場合を除いて、許可されません。

**注:** パスポート・アドバンテージ・エクスプレス・プログラムで許可ユーザー FTL を購入した場合、ライセンス満了前に購入者が IBM に延長を希望しないことを通知しない限り、IBM は現行価格でライセンス期間をさらに 1 年間自動的に延長します。継続 FTL 期間は、最初の FTL 期間の満了時に開始されます。この継続 FTL の価格は、現在、最初の FTL 価格の 80 パーセントですが、変更される可能性があります。

ライセンス期間を延長する意思がないことを IBM に通知した場合は、ライセンス満了時に製品の使用を中止しなければなりません。

## フローティング・ライセンス

IBM Rational フローティング・ライセンスは、複数のチーム・メンバーで共用することができる、単一のソフトウェア製品に対するライセンスです。ただし、同時ユーザーの総数は、購入したフローティング・ライセンスの数を超えてはいけません。例えば、Rational ソフトウェア製品のフローティング・ライセンスを 1 つ購入した場合、組織内の任意のユーザーが任意の時期に製品を使用することができます。製品にアクセスしたい他のユーザーは、現行ユーザーがログオフするまで待たなければなりません。

フローティング・ライセンスを使用するには、フローティング・ライセンス・キーを入手して、Rational License Server にインストールする必要があります。サーバーは、ライセンス・キーへのアクセスを要求するエンド・ユーザー要求に応じます。サーバーは、その組織が購入したライセンス数と同じ数の同時ユーザーにアクセスを許可します。

---

## ライセンスの使用可能化

Rational ソフトウェア製品を初めてインストールする場合、または製品の使用を継続するためにライセンスを延長したい場合に、製品のライセンスを使用可能にする方法を選択します。

Rational Software Development Platform 製品のライセンスを使用可能にするには、以下の 2 つの方法があります。

- プロダクト・アクティベーション・キットをインポートする方法
- Rational Common Licensing を使用可能にし、フローティング・ライセンス・キーにアクセスする方法

**注:** バージョン 7.0 以降の Rational 製品の一部については、インストール後 30 日または 60 日で試用ライセンスの有効期限が切れます。有効期限後に引き続き使用するには、製品をアクティブにする必要があります。アクティベーション

ン・プロセスのフローチャートについては、プロダクト・アクティベーションに関するサポート記事 (support article) を参照してください。

## アクティベーション・キット

プロダクト・アクティベーション・キットには、Rational のトライアル製品のパーマネント・ライセンス・キーが含まれています。アクティベーション・キットを購入し、その Zip ファイルをローカル・マシンにダウンロードしてから、その Jar ファイルをインポートし、製品のライセンスを使用可能にします。IBM Installation Manager を使用して、製品にアクティベーション・キットをインポートします。

## フローティング・ライセンスの適用

オプションで、フローティング・ライセンス・キーを入手して、IBM Rational License Server をインストールすることで、ご使用の製品にフローティング・ライセンスを適用できます。フローティング・ライセンスを適用すると、次のような利点があります。

- 組織全体におけるライセンス準拠の徹底
- ライセンス購入数の削減
- 同じライセンス・サーバーからの、IBM Rational Team Unifying 用および Software Development Platform デスクトップ製品用のライセンス・キーの供給

注: バージョン 7.0 以降の Rational 製品については、Rational ライセンス・サーバーのアップグレード・バージョンが必要となる場合があります。ライセンスのアップグレード情報については、サポート記事 (support article) を参照してください。

アクティベーション・キットおよびフローティング・ライセンスの入手方法について詳しくは、ライセンスの購入を参照してください。

---

## インストール済みパッケージのライセンス情報の表示

IBM Installation Manager からインストール済みパッケージのライセンス情報を確認することができます。ライセンス情報には、ライセンス・タイプおよび有効期限が含まれています。

ライセンス情報を表示するには、以下のようにします。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. メインページで「ライセンスの管理」をクリックします。

インストールされているパッケージごとに、パッケージのベンダー、現行ライセンス・タイプ、および有効期限が表示されます。

---

## プロダクト・アクティベーション・キットのインポート

パーマネント・ライセンス・キーをインストールするには、IBM Installation Manager を使用して、ダウンロード・ロケーションまたは製品メディアからアクティベーション・キットをインポートする必要があります。

アクティベーション・キットを購入していない場合、まず購入する必要があります。製品またはプロダクト・アクティベーション・キットを購入している場合は、該当する CD を挿入するか、IBM パスポート・アドバンテージからアクセス可能なワークステーションにアクティベーション・キットをダウンロードするか、いずれかを行います。アクティベーション・キットは、Java アーカイブ (.jar) ファイルを含む Zip ファイルとしてパッケージされています。この .jar ファイルにはパーマネント・ライセンス・キーが含まれています。製品をアクティブにするには、このキーをインポートする必要があります。

アクティベーション・キットの .jar ファイルをインポートして、新しいライセンス・キーを使用可能にするには、次のようにします。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. メインページで「**ライセンスの管理**」をクリックします。
3. パッケージを選択して「**アクティベーション・キットのインポート**」ボタンをクリックします。
4. 「**次へ**」をクリックします。 選択したパッケージの詳細 (現行のライセンスの種類、ライセンスの対象となる製品バージョンの範囲など) が表示されます。
5. アクティベーション・キットのメディア CD またはダウンロード・ロケーションのパスを参照して、適切な Java アーカイブ (JAR) ファイルを選択し、「**開く**」をクリックします。
6. 「**次へ**」をクリックします。「**要約**」ページに、アクティベーション・キットのインストール宛先ディレクトリー、新規ライセンスが適用される製品、およびバージョン情報が表示されます。
7. 「**終了**」をクリックします。

パーマネント・ライセンス・キーを含むプロダクト・アクティベーション・キットが製品にインポートされます。「**ライセンスの管理**」ウィザードに、インポートが正常に行われたかどうかが表示されます。

---

## フローティング・ライセンスの使用可能化

チーム環境がフローティング・ライセンスの適用をサポートしている場合は、製品に対してフローティング・ライセンスを使用可能にし、フローティング・ライセンス・キーへのアクセスを取得するように接続を構成することができます。

フローティング・ライセンスの適用を可能にする前に、管理者からライセンス・サーバー接続情報を入手してください。ライセンス・サーバー、ライセンス・キー、および Rational Common Licensing の管理について詳しくは、「**ライセンス管理ガイド**」を参照してください。

「**ライセンス管理ガイド**」の最新版は、[http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/v7/rc1/7001/docs/install\\_instruction/license\\_admin.pdf](http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/v7/rc1/7001/docs/install_instruction/license_admin.pdf) でオンラインで入手可能です。

フローティング・ライセンスを指定のパッケージのライセンス・タイプとして使用可能にし、ライセンス・サーバー接続を構成するには、次のようにします。

1. IBM Installation Manager for the Rational Software Development Platform で、「**ファイル**」 → 「**開く**」 → 「**ライセンスの管理**」の順をクリックします。



2. パッケージのバージョンを選択して、「フローティング・ライセンス・サポートの設定」ボタンを選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 「フローティング・ライセンスの適用を可能にする」ボタンをクリックします。
5. 1 つ以上のライセンス・サーバー接続を構成します。
  - a. 「サーバー」テーブルの空フィールドをクリックするか、「追加」ボタンをクリックします。
  - b. 管理者から冗長サーバー環境の情報が提供されている場合、「冗長サーバー」ボタンをクリックします。1 次サーバー、2 次サーバー、および 3 次サーバーの名前フィールドと、ポートのフィールドが表示されます。
  - c. 「名前」フィールドに、ライセンス・サーバーのホスト名を入力します。
  - d. (オプション) ファイアウォールを使用している環境では、「ポート」フィールドに値を入力します。管理者から指示が無い限り、このポートには値を割り当てないでください。
  - e. 冗長サーバー環境の場合、必要に応じて 2 次サーバーと 3 次サーバーの名前およびポートを入力します。
  - f. (オプション) 「接続のテスト」ボタンをクリックして、接続情報が正しいかどうか、サーバーが使用可能であるかどうかを確認できます。
  - g. 「OK」をクリックします。
6. 「次へ」をクリックします。
7. (オプション) シェル共有パッケージまたはカスタム・パッケージのライセンス使用順序を構成します。リスト内のライセンスの順序によって、ご使用のパッケージが特定のライセンス・パッケージのライセンス・キーへのアクセス取得を試みる順序が決定します。
8. 「終了」をクリックします。

「ライセンスの管理」ウィザードに、フローティング・ライセンスの構成が正常に行われたかが示されます。

これによって、使用可能にした製品を次回開いた際に、ライセンス・サーバーに接続して、使用可能なフローティング・ライセンス・キーのプールからライセンス・キーを入手することができます。

---

## ライセンスの購入

現行の製品ライセンスの有効期限が切れる場合、またはチーム・メンバー用に追加の製品ライセンスが必要な場合は、新規ライセンスをご購入いただけます。

ライセンスを購入して製品を使用可能にするには、以下のステップを完了してください。

1. 購入するライセンスのタイプを決定します。
2. [ibm.com](http://ibm.com)<sup>®</sup> にアクセスするか、IBM 営業担当員に連絡を取り、製品ライセンスを購入します。詳しくは、IBM Web ページのソフトウェアのご注文方法をご覧ください。
3. 購入したライセンス・タイプに応じて、受け取ったライセンス証書を使用し、以下のいずれかを実行して製品を使用可能にします。

- 製品の許可ユーザー・ライセンスを購入した場合は、パスポート・アドバンテージにアクセスし、記載されている説明に従って、プロダクト・アクティベーション・キットの Zip ファイルをダウンロードします。アクティベーション・キットをダウンロードしたら、Installation Managerを使用して、プロダクト・アクティベーションの .jar ファイルをインポートする必要があります。
- 製品のフローティング・ライセンスを購入した場合は、IBM Rational ライセンスおよびダウンロード (IBM Rational Licensing and Download) サイト へのリンクをクリックして、ログインし (IBM への登録が必要です)、次に IBM Rational ライセンス・キー・センター (IBM Rational License Key Center) に接続するためのリンクを選択します。そこで、ライセンス証書を使用して、ご使用のライセンス・サーバーのフローティング・ライセンス・キーを取得できます。

オプションで、パスポート・アドバンテージにアクセスして、製品のアクティベーション・キットをダウンロードすることもできます。アクティベーション・キットをインポートした後に、長期間 PC をオフラインで使用する場合は、フローティング・ライセンス・タイプからパーマネント・ライセンス・タイプに切り替えることができます。

この後、アクティベーション・キットをインポートするか、製品のフローティング・ライセンス・サポートを使用可能にする場合は、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用します。

---

## Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす

**重要:** 最適な結果を得るためには、Rational 製品を使用して作業する前に、Rational Application Developer で使用できるファイル・ハンドルの数を増やしてください。プロセス当たりのデフォルト限度数である 1024 個よりも多く使用するためです。(この変更はシステム管理者が行う必要があります。)

以下のこれらのステップに従って Linux でファイル記述子を増やす場合は注意してください。指示に正確に従わないと、コンピューターが正しく始動しなくなる可能性があります。最適な結果を得るために、システム管理者にこの手順を実行してもらってください。

ファイル記述子を増加するには、以下のようにします。

1. root としてログインします。root アクセスがない場合は、継続する前に獲得する必要があります。
2. etc ディレクトリーに移動する。
3. vi エディターを使用して etc ディレクトリー内の initscript ファイルを編集する。このファイルがない場合は、vi initscript と入力して作成してください。

**重要:** ファイル・ハンドルの数を増やす場合は、コンピューター上に空の initscript ファイルを残さないでください。残した場合、次回電源をオンにしたり再始動した場合に、マシンが始動しなくなります。

4. 1 行目に「ulimit -n 4096」と入力する (ここで重要なのは、この数値がほとんどの Linux コンピューターでのデフォルト値である 1024 よりもかなり大きな数値である点です)。注意: この数をあまり高く設定しないでください。システム全体のパフォーマンスに重大な影響を及ぼす可能性があります。
5. 2 行目に eval exec "\$@" と入力する。
6. ステップ 4 と 5 を完了したことを確認した後、ファイルを保管して閉じる。

**注:** ステップを正しく実行したことを確認してください。正しく実行しないと、マシンがブートしなくなります。

7. オプション: etc/security ディレクトリーにある limits.conf ファイルを変更してユーザーまたはグループを制限します。SUSE Linux Enterprise Server (SLES) バージョン 9 と Red Hat Enterprise Linux バージョン 4.0 の両方で、このファイルがデフォルトで用意されています。このファイルがない場合は、ステップ 4 でもっと少ない数 (例えば 2048) を指定することができます。これは、プロセスごとに許容できるオープン・ファイルに対して比較的低い制限をほとんどのユーザーが持てるようにするために必要です。ステップ 4 で比較的低い数字を使用した場合は、これを行うことはそれほど重要ではありません。ただし、ステップ 4 で高い数字を選択した場合は、limits.conf ファイルに限度を設定しないとコンピューターのパフォーマンスに重大な影響があります。

以下は、すべてのユーザーを制限して、後で異なる限度を設定した場合に、サンプルの `limits.conf` ファイルがどのように見えるかを示したものです。このサンプルでは、前述のステップ 4 で記述子を 8192 に設定したことを想定していません。

```
*      soft nofile 1024
*      hard nofile 2048
root   soft nofile 4096
root   hard nofile 8192
user1  soft nofile 2048
user1  hard nofile 2048
```

上記サンプルの \* は、最初にすべてのユーザーの限度を設定するために使用されます。これらの限度は、その後の限度よりも低くなっています。root ユーザーにオープンされている許容記述子の数はこれより高くなり、user1 はその 2 つの間になります。変更を行う前に、`limits.conf` ファイルに含まれている文書を必ず読んで理解しておいてください。

`ulimit` コマンドについて詳しくは、`ulimit` のマニュアル・ページを参照してください。

---

## Rational Application Developer の開始

Rational Application Developer は、デスクトップ環境またはコマンド行インターフェースから開始できます。

Windows の場合: 「スタート」 → 「プログラム」 → <パッケージ・グループ名> → 「**IBM Rational Application Developer**」 → 「**IBM Rational Application Developer**」をクリックします。例えば、「スタート」 → 「プログラム」 → 「**IBM Software Development Platform**」 → 「**IBM Rational Application Developer**」 → 「**IBM Rational Application Developer**」の順をクリックします。

Rational Application Developer をコマンド行から開始する場合は、以下のようにします。

- Windows の場合: <product installation directory>%eclipse.exe -product com.ibm.rational.rad.product.ide
- Linux の場合: <product installation directory>/eclipse -product com.ibm.rational.rad.product.ide

Rational Application Developer バージョン 7 を初めて起動する際、デフォルトで新規ワークスペースに設定されていることに注意してください。必ずマイグレーションの資料をお読みになったうえで、Rational Application Developer バージョン 7.0 で既存のワークスペースを開くようにしてください。



---

## インストールの変更

IBM Installation Manager の「パッケージの変更」ウィザードで、インストール済み製品パッケージの言語およびフィーチャーの選択を変更できます。

デフォルトでは、リポジトリ設定がローカル更新サイトを指していない限り、インターネットへのアクセスが必要になります。詳しくは、Installation Manager のヘルプを参照してください。

**注:** Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてから、変更を開始してください。

インストール済み製品パッケージを変更するには、以下のようになります。

1. Installation Manager の「スタート」ページから、「パッケージの変更」アイコンをクリックします。
2. 「パッケージの変更」ウィザードで、Rational Application Developer 製品パッケージのインストール・ロケーションを選択し、「次へ」をクリックします。
3. 「言語」の「変更」ページでパッケージ・グループの言語を選択して、「次へ」をクリックします。パッケージのユーザー・インターフェースおよびドキュメンテーションについて、対応する各国語翻訳がインストールされます。この選択は、このパッケージ・グループにインストールされたすべてのパッケージに適用されることに注意してください。
4. 「フィーチャー」ページで、インストールまたは除去するパッケージ・フィーチャーを選択します。
  - a. フィーチャーの内容を知りたい場合は、そのフィーチャーをクリックして、「詳細」で簡単な説明を確認します。
  - b. フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示 (Show Dependencies)**」を選択します。フィーチャーをクリックすると、それに依存するフィーチャーとその従属フィーチャーが、「依存関係」ウィンドウに表示されます。パッケージ内のフィーチャーを選択したり除外したりすると、Installation Manager は、他のフィーチャーとの依存関係を自動的に強制し、ダウンロード・サイズおよびインストールに必要なディスク・スペース所要量を更新して表示します。
5. フィーチャーの選択が終了したら、「次へ」をクリックします。
6. インストール・パッケージを変更する前に「要約」ページで選択内容を確認し、次に「変更」をクリックします。
7. オプション: 変更プロセスが完了したら、「ログ・ファイルの表示」をクリックして完了ログを確認します。





---

## Rational Application Developer の更新

IBM Installation Manager でインストールされたパッケージの更新をインストールできます。

デフォルトでは、リポジトリ設定がローカル更新サイトを指していない限り、インターネットへのアクセスが必要になります。

各インストール済みパッケージには、それぞれのデフォルトの IBM 更新リポジトリのロケーションが組み込まれています。Installation Manager によって IBM 更新リポジトリ・ロケーションでインストール済みパッケージを検索する場合は、「リポジトリ」の設定ページで「インストールと更新を行っている間にサービス・リポジトリを検索します」を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。

詳しくは、Installation Manager のヘルプを参照してください。

**注:** Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてから、更新を開始してください。

製品パッケージの更新を検索してインストールするには、次のようにします。

1. Installation Manager の「スタート」ページで、「**パッケージの更新**」をクリックします。
2. Installation Manager の新しいバージョンが検出されると、そのバージョンのインストールの確認を求めるプロンプトが表示されます。インストールする旨を確認しないと、続行することはできません。「**OK**」をクリックして先に進みます。Installation Manager は自動的に、新しいバージョンのインストール、停止、再始動、および再開を実行します。
3. 「パッケージの更新」ウィザードで、更新する Rational Application Developer 製品パッケージがインストールされているパッケージ・グループのロケーションを選択するか、「**すべて更新 (Update All)**」チェック・ボックスを選択して、「**次へ**」をクリックします。Installation Manager は、そのリポジトリ内、および Rational Application Developer の事前に定義した更新サイトで更新を検索します。プログレス・バーに検索状況が表示されます。
4. パッケージの更新が検出されると、「パッケージの更新」ページの各パッケージの下の「**更新**」リストにそれらが表示されます。デフォルトでは、推奨される更新のみが表示されます。「**すべてを表示**」をクリックすると、使用可能なパッケージに対して検出されたすべての更新が表示されます。
  - a. 更新の詳細を知りたい場合は、「更新」をクリックし、「**詳細**」の下の説明を参照してください。
  - b. 更新に関する追加情報が入手可能な場合は、説明本文の最後に「**詳細情報**」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、ブラウザーに情報が表示されます。更新をインストールする前に、この情報を確認しておくようにしてください。

5. インストールする更新を選択するか、「**推奨を選択**」をクリックしてデフォルトの選択を復元します。依存関係のある更新は、自動でまとめて選択およびクリアされます。
6. 「**次へ**」をクリックして続けます。
7. 「**ライセンス**」ページで、選択した更新のご使用条件を読みます。「**ライセンス**」ページの左側に、選択した更新のライセンスのリストが表示されます。各項目をクリックすると、ご使用条件の本文が表示されます。
  - a. ご使用条件のすべての条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックします。
  - b. 「**次へ**」をクリックして続けます。
8. 更新をインストールする前に「**要約**」ページで選択内容を確認します。
  - a. 前のページで行った選択を変更したい場合は、「**戻る**」をクリックして変更を行います。
  - b. そのままで問題なければ、「**更新**」をクリックし、更新をダウンロードしてインストールします。プログレス・バーにインストールの完了パーセントが表示されます。

**注:** 更新プロセス中に、**Installation Manager** がパッケージの基本バージョンのリポジトリ・ロケーションの入力を求めるプロンプトを表示することがあります。製品を CD またはその他のメディアからインストールした場合は、更新機能を使用するときそれらのメディアを使用できるようにしておく必要があります。
9. オプション: 更新プロセスが完了すると、プロセスの成功を確認したというメッセージが、ページの上部に表示されます。「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、新規ウィンドウで現行セッションのログ・ファイルを開きます。続行するには、「**インストール・ログ**」ウィンドウを閉じる必要があります。
10. 「**終了**」をクリックしてウィザードを閉じます。

---

## Rational Application Developer のアンインストール

Installation Manager の「アンインストール」パッケージ・オプションを使用すると、1 つのインストール・ロケーションから複数のパッケージをアンインストールできます。すべてのインストール・ロケーションからインストール済みのすべてのパッケージをアンインストールすることもできます。

パッケージをアンインストールするには、製品パッケージをインストールするために使用したのと同じユーザー・アカウントを使用して、システムにログインする必要があります。

パッケージをアンインストールするには、以下のようにします。

1. Installation Manager を使用してインストールしたプログラムを閉じます。
2. 「スタート」ページで「パッケージのアンインストール」アイコンをクリックします。
3. 「パッケージのアンインストール」ページで、アンインストールする Rational Application Developer 製品パッケージを選択します。「次へ」をクリックします。
4. 「要約」ページでアンインストールするパッケージのリストを確認してから「アンインストール」をクリックします。アンインストールが終了すると、「完了」ページが表示されます。
5. 「終了」をクリックしてウィザードを終了します。



---

## オプション・ソフトウェアのインストール

以下のオプション・ソフトウェアが Rational Application Developer インストール・イメージに組み込まれています。

- IBM WebSphere Portal バージョン 5.1 テスト環境
- IBM WebSphere Portal バージョン 6.0 テスト環境
- IBM Rational Agent Controller バージョン 7.0.1
- IBM Rational ClearCase LT バージョン 7.0
- Crystal Reports Server XI Release 2

---

## WebSphere Portal テスト環境、バージョン 5.1.0.x のインストール

Portal テスト環境により、Rational Application Developer ワークベンチからポータル・アプリケーションをテストすることができます。

Windows および Linux ワークステーションの場合の WebSphere Portal 5.1.0.x のインストールおよびアンインストールに関する詳細な説明と、システム要件の詳細については、WebSphere Portal 5.1 のインフォメーション・センター (<http://www.ibm.com/websphere/portal/library>) を参照してください。

## CD-ROM または電子イメージからの WebSphere Portal テスト環境、バージョン 5.1.0.x のインストール

ポータル・テスト環境をインストールするには、事前に Rational Application Developer をインストールしておく必要があります。Portal テスト環境のインストールを開始する前に、Rational Application Developer を停止することをお勧めします。

WebSphere Portal テスト環境 5.1.0.x をインストールするには、以下のステップに従ってください。

1. WebSphere Application Server、WebSphere Portal、WebSphere Application Server 統合テスト環境、または WebSphere Portal 統合テスト環境のいずれかをインストールしている場合は、そのすべてが停止されていることを確認し、また、必ず HTTP サーバーも停止するようにしてください。さもないと、インストールが失敗することがあります。
2. 以下のいずれかの方法で、WebSphere Portal テスト環境、バージョン 5.1 のインストール・プログラムを開始します。
  - Rational Application Developer ランチパッド・プログラム (33 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照) から、「**WebSphere Portal v5.1 テスト環境**」をクリックします。
  - WebSphere Portal 5.1.0.x のセットアップ CD を挿入します。Windows システムでは、インストール・プログラムは自動的に開始します。開始しない場合、または Linux システムにインストールする場合は、セットアップ CD またはディスク・イメージのルートで次のコマンドを実行してください。

- Windows の場合: `install.bat -W dependency.useValidation=false`
- Linux の場合: `install.sh -W dependency.useValidation=false`

注: 電子イメージからインストール・プログラムを開始すると、「[:不正なインタープリター : そのようなファイルまたはディレクトリは存在しません (:bad interpreter : no such file or directory)」エラーが表示されることがあります。インストールを正常に開始するには、セットアップ・ディスク・イメージのディレクトリに変更して、コマンド `dos2unix install.sh -W dependency.useValidation=false` を実行します。

3. インストール・プログラムの実行に使用する言語を選択し、「OK」をクリックして続きます。
4. インストール・プログラムのウェルカム・ページの情報を読み、「次へ」をクリックします。
5. 使用許諾契約書を受諾して、「次へ」をクリックします。
6. 「テスト環境」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックします。プラットフォームによっては、オペレーティング・システムの前提条件検査に失敗したことを示すエラー・メッセージを受け取ることがあります。その理由は、一部のオペレーティング・システム (例: Red Hat Enterprise Linux Workstation バージョン 3.0) は、ポータル・テスト環境でのみサポートされているからです。このメッセージは無視しても問題ありません。「OK」をクリックして、インストールを続行してください。
7. WebSphere Application Server V5.1 のデフォルト・インストール・ディレクトリを受け入れるか、ブラウズして新規ディレクトリを選択し、「次へ」をクリックします。デフォルトのインストール・ディレクトリは、Windows では `C:\Program Files\Portal51UTE\AppServer` で、Linux では `opt/Portal51UTE/AppServer` です。十分なスペースがない場合を除き、デフォルトのインストール・ディレクトリを推奨します。
8. ポータル・テスト環境のデフォルト・インストール・ディレクトリを受け入れるか、またはブラウズして新規ディレクトリを選択し、「次へ」をクリックします。デフォルトのインストール・ディレクトリは、Windows では `C:\Program Files\Portal51UTE\PortalServer` で、Linux では `opt/Portal51UTE/PortalServer` です。十分なスペースがない場合を除き、デフォルトのインストール・ディレクトリを推奨します。
9. ポータル・テスト環境で使いたいユーザー ID とパスワードを指定します。「次へ」をクリックします。
10. 要約画面の情報を検討し、「次へ」をクリックします。
11. プロンプトが表示されたら、該当する WebSphere Portal 5.1 CD を挿入して、そのドライブ・ロケーションを指定します。
12. インストールが終了したら、「終了」をクリックしてインストール・プログラムを閉じます。

## DB2 または Oracle データベースを WebSphere Portal 構成リポジトリとして使用

デフォルトで、 WebSphere Portal 5.1 テスト環境は Cloudscape™ データベースをインストールおよび使用して、ポータル・リソースにアクセスするためのユーザー ID、証明書、およびアクセス権を保管します。 Cloudscape は基本的なポータル環境に適した WebSphere Portal の組み込み Java データベースです。

DB2 または Oracle データベースをインストールして構成するには、[www.ibm.com/websphere/portal/library](http://www.ibm.com/websphere/portal/library) の「WebSpherePortal V5.1 InfoCenter」を参照してください。この説明は、 WebSphere Portal バージョン 5.1 の InfoCenter の、「構成」→「データベース」の下にあります。 InfoCenter 内の構成の説明を参照する際は、InfoCenter の `<wp_root>` は WebSphere Portal 5.1 テスト環境のインストール・ディレクトリに対応し、InfoCenter の `<was_root>` は WebSphere Application Server V5.1 のインストール・ディレクトリに対応することに注意してください (デフォルト・ロケーションについては上記を参照)。また、データベース接続を検査するには、 InfoCenter のステップに従うのではなく、 WebSphere Portal 5.1 テスト環境を作成してサーバーを開始します。

## WebSphere Portal テスト環境、バージョン 5.1.0.x のアンインストール

WebSphere Portal テスト環境 5.1.0.x は、グラフィカル・アンインストール・プログラムを使用してアンインストールできます。

Windows および Linux からの WebSphere Portal 5.1 のアンインストールについての詳細な説明は、 WebSphere Portal 5.1 のインフォメーション・センター (<http://www.ibm.com/websphere/portal/library>) を参照してください。アンインストールする前に行う決定およびステップに関する情報と、手動でのアンインストールなど、その他のアンインストール方法についての情報があります。

グラフィカル・アンインストール・プログラムを使用して WebSphere Portal テスト環境 5.1.0.x をアンインストールするには、次のようにします。

1. 以下のいずれかの手順を実行して、アンインストール・プログラムを起動します。
  - **Windows のみ:** 「コントロール パネル」の「プログラムの追加と削除」ウィンドウから、「WebSphere Portal」を選択します。
  - コマンド・プロンプトからアンインストール・プログラムを開始します。
    - a. ディレクトリ `portal_server_root/uninstall` に移動します。
    - b. オペレーティング・システムに応じて次のコマンドを実行します。
      - Linux の場合: `./uninstall.sh`
      - Windows の場合: `uninstall.bat`
2. アンインストール用の言語を選択し、「OK」をクリックします。ようこそパネルが表示されます。
3. アンインストールするコンポーネントを選択して、「次へ」をクリックします。

注: WebSphere Application Server のアンインストール・プログラムでは、意図的にそのルート・レジストリー・キーが Windows レジストリーに残されません。

4. 「次へ」をクリックすると、確認パネルが表示されます。
5. 「次へ」をクリックすると、アンインストール・プロセスが開始されます。アンインストール・プログラムが終了すると、プログラムによって確認パネルが表示されます。
6. 「終了」をクリックして、アンインストール・プログラムを閉じます。
7. マシンを再始動します。特に、 WebSphere Portal を同じマシンに再度インストールする場合は、必ず再始動してください。

---

## WebSphere Portal バージョン 6.0 テスト環境のインストール

Portal テスト環境により、 Rational Application Developer ワークベンチからポータル・アプリケーションをテストすることができます。

Windows および Linux ワークステーションの場合の WebSphere Portal 6.0 のインストールおよびアンインストールに関する詳細な説明と、システム要件の詳細については、 WebSphere Portal 5.0 のインフォメーション・センター (<http://www.ibm.com/websphere/portal/library>) を参照してください。

## CD-ROM または電子イメージからの WebSphere Portal テスト環境、バージョン 6.0 のインストール

WebSphere Portal 6.0 をインストールするには、以下の手順に従います。詳しくは、 IBM WebSphere Portal バージョン 6.0 のインフォメーション・センター (<http://www.ibm.com/websphere/portal/library>) を参照してください。

WebSphere Portal テスト環境 6.0 をインストールするには、次の手順に従います。

1. 電子イメージからインストールする場合は、すべてのポータル・ディスク・イメージが同じディレクトリーに解凍またはコピーされていることを確認します。 19 ページの『ダウンロードしたファイルの解凍』を参照してください。
2. WebSphere Application Server、 WebSphere Portal、 WebSphere Application Server 統合テスト環境、または WebSphere Portal 統合テスト環境のいずれかをインストールしている場合は、そのすべてが停止されていることを確認し、また、必ず HTTP サーバーも停止するようにしてください。 さもないと、インストールが失敗することがあります。
3. 以下のいずれかの方法で、 WebSphere Portal テスト環境、バージョン 6.0 のインストール・プログラムを開始します。
  - Rational Application Developer ランチパッド・プログラム (33 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照) で、「**WebSphere Portal V6.0 テスト環境**」をクリックします。
  - WebSphere Portal 6.0 のセットアップ CD を挿入します。 Windows システムでは、インストール・プログラムが自動的に開始します。開始しない場合、または Linux システムにインストールする場合は、セットアップ CD またはディスク・イメージのルートで次のコマンドを実行してください。



- Windows の場合: install.bat
  - Linux の場合: install.sh
4. インストール・プログラムの実行に使用する言語を選択し、「OK」をクリックして続きます。
  5. インストール・プログラムのウェルカム・ページの情報を読み、「次へ」をクリックします。
  6. ご使用条件および IBM 以外の条件を読みます。同意する場合は、「IBM および IBM 以外の条件に同意します (I accept the both the IBM and the non-IBM terms)」を選択して、「次へ」をクリックします。
  7. WebSphere Application Server V6.0 のデフォルト・インストール・ディレクトリーを受け入れるか、ブラウズして新規ディレクトリーを選択し、「次へ」をクリックします。デフォルトのインストール・ディレクトリーは、Windows では C:\Program Files\IBM\Portal60\UTE\AppServer で、Linux では opt/IBM/Portal60/AppServer です。十分なスペースがない場合を除き、デフォルトのインストール・ディレクトリーを推奨します。
  8. デフォルトの WebSphere アプリケーション・サーバー・プロパティーを受け入れるか、以下の項目を指定します。
    - セル名。
    - WebSphere Application Server セル内の、WebSphere Portal アプリケーション・サーバーをインストールするノード。この値は、同一セル内の他のノード名の間で固有である必要があります。この値は、通常はコンピューターのホスト名と同じです。
    - WebSphere Application Server が稼働するコンピューターの完全修飾 DNS 名、短縮 DNS 名、または IP アドレス。localhost やループバック・アドレスは使用できません。
  9. WebSphere Application Server 管理者のユーザー ID とパスワード。ユーザー ID にもパスワードにもブランクは使用しないでください。また、パスワードの長さは 5 文字以上にしてください。このユーザー ID は、インストール後、WebSphere Application Server に管理者権限でアクセスする際に使用します。このユーザー ID は、WebSphere Application Server へのログインに使用されるだけで、オペレーティング・システム自体へのアクセスに使用するユーザー ID とは何の関係もありません。「次へ」をクリックして続けます。
  10. ビジネス・プロセスのサポート用に WebSphere Portal Process Server をインストールするかどうかを選択し、「次へ」をクリックして先に進みます。重要: 本製品をインストールする目的が、作成されるノードを管理対象セルに追加することや、そのノードをクラスターの一部として使用することである場合は、以下の 2 つの方法のいずれかをとることができます。
    - 管理対象セルまたはクラスターでビジネス・プロセス統合サポートが必要な場合は、既にデプロイメント・マネージャーに統合されているノードに WebSphere Portal をインストールする必要があります。このインストール・プロセスを終了し、WebSphere Portal バージョン 6.0 インフォメーション・センターのトピック『クラスターのセットアップ』を参照してください。

- 管理対象セルまたはクラスターでビジネス・プロセス統合サポートが不要な場合は、このパネルで「WebSphere Process Server をインストールしない (Do not install WebSphere Process Server)」を選択して、先に進みます。

管理対象セルまたはクラスターでビジネス・プロセス統合サポートが必要な場合は、既にデプロイメント・マネージャーに統合されているノードに WebSphere Portal をインストールする必要があります。詳しくは、このインストール・プロセスを終了し、『クラスターのセットアップ』を参照してください。 WebSphere Portal を、ビジネス・プロセス統合のサポートも含めて管理対象外ノードにインストールする場合は、そのノードを管理対象セルに追加することも、後でクラスターの一部として使用することもできません。

11. Portal Server のデフォルト・インストール・ディレクトリーを受け入れるか、またはブラウズして新規ディレクトリーを選択し、「次へ」をクリックします。デフォルトのインストール・ディレクトリーは、Windows では C:\Program Files\IBM\Portal60UTE\PortalServer で、Linux では opt/IBM/Portal60UTE/PortalServer です。十分なスペースがない場合を除き、デフォルトのインストール・ディレクトリーを推奨します。指定したディレクトリーが存在しない場合は、作成されます。Windows にインストールする場合は、インストール・パスにピリオド (.) は使用できません。「次へ」をクリックします。
12. WebSphere Portal アドミニストレーターのユーザー ID とパスワードを入力します。ユーザー ID にもパスワードにもブランクは使用しないでください。また、パスワードの長さは 5 文字以上にしてください。このユーザー ID は、インストール後、WebSphere Portal に管理者権限でアクセスする際に使用します。このユーザー ID は、WebSphere Portal へのログインに使用されるだけで、オペレーティング・システム自体へのアクセスに使用するユーザー ID とは何の関係もありません。Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) ディレクトリーでユーザーを管理する場合は、ここで指定する管理者ユーザー ID が、『ユーザー ID とパスワードの特殊文字』で指定されている推奨に準拠していることを確認してください。「次へ」をクリックする。
13. インストールされる製品を確認して「次へ」をクリックします。インストール・プログラムが起動して、選択したコンポーネントがインストールされます。インストール・プロセスおよび構成プロセス中は、インストール・プログラムに、各コンポーネントのプログレス・バーが表示されます。

注: インストールの完了までにはしばらく時間がかかります。プログレス・バーと、プラットフォームのプロセス・モニター機能で、インストールの進行状況全体をモニターできます。

14. CD からインストールする場合は、プロンプトが表示されたら、該当する WebSphere Portal 6.0 CD を挿入して、そのドライブ・ロケーションを指定します。
15. インストールが終了すると、インストール・プログラムに、インストールされたコンポーネントをリストした確認パネルが表示されます。以下の情報を書き留めてから「終了」をクリックします。
  - 確認パネルには、WebSphere Portal へのアクセスに使用されるポート番号が表示されます。WebSphere Portal URL の確認に使用するので、このポート番号をメモしておいてください。この値は、<portal installation directory>/config/wpconfig.properties ファイルの WpsHostPort プロパティーにも格納されています。

- WebSphere Portal ファースト・ステップを使用して WebSphere Portal にアクセスする場合は、「ファースト・ステップの起動 (Launch First Steps)」が選択されていることを確認します。ファースト・ステップからは、WebSphere Portal にアクセスすることも、WebSphere Portal の資料を読むこともできます。
16. 「終了」をクリックします。
  17. WebSphere Portal が稼働していることを確認するには、ブラウザーで `http://example.com:port_number/wps/portal` という URL にアクセスします。example.com は、WebSphere Portal が稼働しているマシンの完全修飾ホスト名、port\_number は確認パネルに表示されるポート番号です。例えば、`http://www.ibm.com:10038/wps/portal` のようになります。
  18. WebSphere Portal は稼働中です。重要: この時点では、セキュリティーは有効になっています。

WebSphere Portal 6.0 の使用については、IBM WebSphere Portal バージョン 6.0 のインフォメーション・センター (<http://www.ibm.com/websphere/portal/library>) を参照してください。

## DB2、Oracle、または SQL Server データベースを WebSphere Portal 構成リポジトリとして使用

WebSphere Portal テスト環境 バージョン 6.0 は、構成、アクセス制御 (ユーザー ID、証明書、ポータル・リソースへのアクセス権など)、およびユーザー・データをデータベースに格納します。デフォルトでは、WebSphere Portal は Cloudscape データベースをインストールして使用します。ただし、サポートされている別のデータベースを使用することもできます。

WebSphere Portal V6.0 での使用がサポートされている別のデータベース (DB2、Oracle、SQL Server データベースなど) のインストールと構成については、WebSphere Portal V6.0 のインフォメーション・センター ([www.ibm.com/websphere/portal/library](http://www.ibm.com/websphere/portal/library)) を参照してください。WebSphere Portal バージョン 6.0 インフォメーション・センターの『構成』 → 『データベースの構成』に説明があります。

## WebSphere Portal テスト環境、バージョン 6.0 のアンインストール

WebSphere Portal テスト環境 6.0 は、グラフィカル・アンインストール・プログラムを使用してアンインストールできます。

WebSphere Portal 6.0 を、Windows システムおよび Linux システムからアンインストールする詳細な手順については、WebSphere Portal 6.0 インフォメーション・センター (<http://www.ibm.com/websphere/portal/library>) を参照してください。アンインストールの計画に関する情報だけでなく、他のアンインストール方法 (手動アンインストールなど) に関する情報も記載されています。

WebSphere Portal テスト環境 6.0 を、グラフィカル・アンインストール・プログラムを使用してアンインストールするには、以下のようにします。

1. WebSphere Portal 6.0 の、Windows システムおよび Linux システムからのアンインストール計画に関する情報を、WebSphere Portal 6.0 インフォメーション・センター (<http://www.ibm.com/websphere/portal/library>) で調べます。
2. 以下のいずれかの手順を実行して、アンインストール・プログラムを起動します。
  - **Windows のみ:** 「コントロール パネル」の「プログラムの追加と削除」ウィンドウから、「WebSphere Portal」を選択します。
  - コマンド・プロンプトからアンインストール・プログラムを開始します。
    - a. ディレクトリー `portal_server_root/uninstall` に移動します。
    - b. オペレーティング・システムに応じて次のコマンドを実行します。
      - Linux の場合: `./uninstall.sh`
      - Windows の場合: `uninstall.bat`
3. アンインストール用の言語を選択し、「OK」をクリックします。ようこそパネルが表示されます。
4. アンインストールするコンポーネントを選択して「次へ」をクリックします。

**注:** WebSphere Application Server のアンインストール・プログラムでは、意図的にそのルート・レジストリー・キーが Windows レジストリーに残されません。
5. 「次へ」をクリックすると、確認パネルが表示されます。
6. 「次へ」をクリックすると、アンインストール・プロセスが開始されます。アンインストール・プログラムが終了すると、プログラムによって確認パネルが表示されます。
7. 「終了」をクリックしてアンインストール・プログラムを閉じます。
8. マシンを再始動します。特に、WebSphere Portal を同じマシンに再度インストールする場合は、必ず再始動してください。

---

## Agent Controller のインストール

Agent Controller は、クライアント・アプリケーションによるローカル・アプリケーションまたはリモート・アプリケーションの起動および管理を可能にしたり、実行中のアプリケーションに関する情報を他のアプリケーションに提供できるようにするデーモンです。次のツールを使用するためには、事前に Agent Controller を別にインストールしておく必要があります。

- アプリケーションのプロファイルを作成するプロファイル作成ツール。プロファイルを作成するアプリケーションと同じシステム上に、Agent Controller がインストールされている必要があります。
- リモート・ログ・ファイルをインポートするためのロギング・ツール。Agent Controller が、ログ・ファイルのインポート元のリモート・システムにインストール済みで、なおかつ実行中である必要があります。
- テスト・ケースを実行するためのコンポーネント・テスト・ツール。Agent Controller が、テスト・ケースを実行するシステム上にインストールされている必要があります。
- WebSphere Application Server バージョン 5.0 または 5.1 でのリモート・アプリケーションのテスト用ツール。(Agent Controller は、アプリケーションのリモート

ト公開、またはローカル・アプリケーション公開またはテストのためにインストールする必要はありません)。WebSphere Application Server バージョン 6.0 にはこの機能が組み込まれているため、Agent Controller はバージョン 6.0 のターゲット・サーバーでは必要ない点に注意してください。

注:

- Agent Controller は、ファイアウォールの後ろにインストールすることを強くお勧めします。
- Agent Controller の使用に伴うセキュリティーの詳細については、Agent Controller の資料を参照してください。
- Agent Controller のオンライン資料は、ソフトウェアがインストールされるまでインストールされません。その時点で、資料はオンライン・ヘルプに追加されません。
- Agent Controller バージョン 7.0.1 をインストールする前に、下記の説明に従って Agent Controller の前のバージョンをアンインストールする必要があります。

Agent Controller のサイレント・インストールについて詳しくは、下記の説明を参照してください。

## ハードウェア前提条件

- Windows, Linux/IA32: Intel Pentium II プロセッサ以上。 Pentium III 500 MHz 以上推奨。
- AIX®: PowerPC® 604e 233MHz (IBM RS/6000® 7043 43P Series) 以上。
- HP-UX: PA8500 300MHz (HP Workstation C3000) 以上。
- Solaris: UltraSPARC-III 300MHz (Sun Ultra 10 Workstation) 以上。
- OS/40: iSeries™ (オペレーティング・システムにより必要)
- z/OS®, LINUX/S39: zSeries® (オペレーティング・システムにより必要)
- Linux/ppc64: POWER5™ プロセッサ・ベースの pSeries® および iSeries (オペレーティング・システムにより必要)
- 512 MB RAM 以上 (768 MB RAM 推奨)
- ディスク・スペース:
  - インストールのために最小 100 MB のディスク・スペースが必要になります。
- ディスプレイ解像度:
  - 800 x 600 ディスプレイ以上 (1024 x 768 推奨)

## サポートされるプラットフォーム

**Linux に関する注意:** Agent Controller は、libstdc++-libc6.2-2.so.3 共用ライブラリーを使用してコンパイルされます。この共用ライブラリーが /usr/lib ディレクトリリーにあることを確認してください。ない場合は、オペレーティング・システムのインストール・メディアに付属の RPM パッケージ compat-libstdc++ をインストールする必要があります。

Agent Controller v7.0.1 は、以下のプラットフォームでサポートされています。

- AIX v5.2、 v5.3、 5L on PowerPC (32 ビット)

- z/OS V1R4、 V1R5、 V1R6、 V1R7 on zSeries (32 ビット)
- OS/400® V5R2、 V5R3、 V5R4 on iSeries
- Linux 2.4 および 2.6 カーネル。サポートされる配布には、以下が含まれていません。
  - Red Hat Linux Advanced Server v2.1 on Intel IA32
  - Red Hat Enterprise Linux AS release 3 on PowerPC (64-bit)
  - Red Hat Enterprise Linux (RHEL) v3.0 および v4.0
  - SUSE Linux Enterprise Server (SLES) v9 on Intel IA32
  - SUSE Linux Enterprise Server (SLES) v8 on zSeries (32 ビット)
- Windows 2000 Server または Advanced Server (SP4) on Intel IA32
- Windows 2000 Professional (SP3) on Intel IA32
- Windows 2003 Server Standard および Enterprise (SP1) on Intel IA32
- Windows 2003 Server Enterprise x64 Edition (SP1) on EM64T (64 ビット)
- Windows XP Professional (SP2) on Intel IA32
- HP-UX v11.0、 v11i on PA-RISC
- Sun Solaris v8、 v9、 v10.0 on SPARC

## サポートされる JVM

一般に、Agent Controller は Java 仮想マシン (JVM) バージョン 1.4 以上で機能します。以下は Agent Controller がテストされた JVM バージョン (java -fullversion) です。

- AIX: J2RE 1.4.1 IBM AIX build ca1411-20040301
- AIX: J2RE 1.5.0 IBM AIX build pap32devifx-20060310 (SR1)
- HP-UX: J2RE 1.4.2.03-040401-18:59-PA\_RISC2.0
- Linux for Intel IA32: J2RE 1.4.1 IBM build cxia321411-20040301、 J2RE 1.4.2 IBM。
- Linux for Intel IA32: J2RE 1.5.0 IBM Linux build pxi32dev-20060511 (SR2)
- Linux for PPC64: J2RE 1.4.2 IBM build exp64142-20040917 (JIT 使用可能: jite)
- Linux for PPC64: J2RE 1.5.0 IBM Linux build pxp64devifx-20060310 (SR1)
- Linux for OS/390®: J2RE 1.4.1 IBM build cx3901411-20040301
- Linux for OS/390: J2RE 1.4.2 IBM build cx390142-20050609
- z/OS: J2RE 1.4.1 IBM z/OS Persistent Reusable VM build cm1411-20030930
- z/OS: J2RE 1.5.0 IBM z/OS build pmz31dev-20051104a
- OS/400: J2RE 1.4 IBM
- OS/400: J2RE 1.5 IBM
- Solaris SPARC: Sun Java 2 Standard Edition (build 1.4.2\_04-b05)
- Solaris SPARC: 1.5.0\_06-b05
- Windows: IA32 J2RE 1.4.1 IBM Windows 32 build cn1411-20040301a、 J2RE 1.4.2 IBM Windows 32、 Sun Java 2 Standard Edition (build 1.4.2\_04-b05)
- Windows\_IA32: 1.5.0\_04-b05、 J2RE 1.5.0 IBM Windows 32 build pwi32dev-20051222

- Windows\_EM64T (64-bit): Sun Java 2 Runtime Environment, Standard Edition (build 1.5.0\_06-b05) v1.5.0 06

## インストール・ファイルの探索

インストール・ファイルは、以下のディレクトリーの Agent Controller ディスクにあります。

- AIX の場合: <Agent Controller CD>/aix\_powerpc
- HP-UX の場合: <Agent Controller CD>/hpux
- OS/400 の場合: <Agent Controller CD>/os400
- Linux on z/Series の場合: <Agent Controller CD>/linux\_s390
- Linux on Intel IA32 の場合: <Agent Controller CD>/linux\_ia32
- Linux on PPC64 の場合: <Agent Controller CD>/linux\_ppc64
- Solaris の場合: <Agent Controller CD>/solaris\_sparc
- Windows on Intel IA32 の場合: <Agent Controller CD>%win\_ia32
- Windows on Intel Extended Memory 64 Technology (64 ビット) の場合: <Agent Controller CD>%win\_em64t
- For Windows on Intel Itanium® システム (64 ビット) の場合: <Agent Controller CD>%win\_ipf
- z/OS の場合: <Agent Controller CD>/os390

## ワークステーション (AIX、HP-UX、Linux、Windows、Solaris) への Agent Controller のインストール

### Agent Controller の前のバージョンのアンインストール

注: Agent Controller バージョン 7.0.1 をインストールする前に、前のバージョンの Agent Controller をアンインストールする必要があります。

- Agent Controller 7.0 または 6.x が検出された場合、Agent Controller v7.0.1 インストーラーは次のような警告を出してインストールをブロックします。「既存の IBM Rational Agent Controller を除去し、インストールを再実行してください。」サイレント・インストーラーを使用した場合、Agent Controller v7.0.1 インストーラーは警告を出さずにインストールを終了します。
- Agent Controller v7.0.1 が既にインストールされている場合、インストーラーは次のような警告を出します。「この製品はすでに <rac\_install\_dir> にインストール済みです。」既存のインストールを上書きする場合は、「次へ」をクリックします。インストールの継続を選択すると、インストーラーは既存のインストールを上書きします。サイレント・インストーラーを使用した場合には、警告なしに既存のインストールが上書きされます。

**Windows から Agent Controller V6.x をアンインストールする場合は、残っているファイルを手動で除去する必要があります。これを行うには、Agent Controller を停止してアンインストールしてから、アンインストール後に残されている可能性のある以下のファイルをすべてクリーンアップします。**

### Windows:

```
%RASERVER_HOME%\*.* (Agent Controller がインストールされている  
ディレクトリー)  
%SystemRoot%\system32\piAgent.dll (Windows の system32  
ディレクトリー)  
%SystemRoot%\system32\LogAgent.dll  
%SystemRoot%\system32\hcbnd.dll  
%SystemRoot%\system32\hcc1co.dll  
%SystemRoot%\system32\hcc1dt.dll  
%SystemRoot%\system32\hcc1s.dll  
%SystemRoot%\system32\hcc1serc.dll  
%SystemRoot%\system32\hcc1sert.dll  
%SystemRoot%\system32\hcc1sm.dll  
%SystemRoot%\system32\hcbnd.dll  
%SystemRoot%\system32\hclaunch.dll  
%SystemRoot%\system32\hcthread.dll  
%SystemRoot%\system32\piAgent.dll  
%SystemRoot%\system32\rac.dll  
%SystemRoot%\system32\sysperf.dll
```

UNIX<sup>®</sup> プラットフォームから Agent Controller V6.x または V7.x をアンインストールする場合は、残っているファイルを手動で除去する必要があります。これを行うには、Agent Controller を停止してアンインストールしてから、アンインストール後に残されている可能性のある以下のファイルをすべてクリーンアップします。

### Linux, AIX, HP-UX, Solaris:

```
$RASERVER_HOME/* (Agent Controller がインストールされている  
ディレクトリー)  
/usr/lib/libpiAgent.so (HP-UX では .sl)  
/usr/lib/libLogAgent.so  
/usr/lib/libhcbnd.so  
/usr/lib/libhcc1co.so  
/usr/lib/libhcc1dt.so  
/usr/lib/libhcc1s.so  
/usr/lib/libhcc1serc.so  
/usr/lib/libhcc1sert.so  
/usr/lib/libhcc1sm.so  
/usr/lib/libhcbnd.so  
/usr/lib/libhclaunch.so  
/usr/lib/libhcthread.so
```

バージョン 7.0.1 では、Agent Controller は次の場所にインストールされません。

**Windows:**<rac\_install\_dir>\bin

**Linux:**<rac\_install\_dir>/lib

ここで、<rac\_install\_dir> は、Agent Controller のインストール・ディレクトリーです。

## Agent Controller のインストール

1. 管理者 (または root) としてログインする。
2. ディレクトリーを、適切なプラットフォームのインストール・ファイルを unzip したディレクトリーに変更する。
3. インストールを続ける前に、すべての Eclipse プラットフォームを閉じる。
4. **setup.exe** プログラムを実行する。Windows 以外のプラットフォームの場合は、**setup.bin** を実行してください。
5. 初期画面で「次へ」をクリックして先へ進む。



6. ご使用条件を読む。
7. 「使用条件の条項に同意します」を選択し、「次へ」をクリックして先へ進む。
8. Agent Controller をインストールするパスを指定し、「次へ」をクリックして先へ進む。
9. Agent Controller が使用する Java ランタイム環境 (JRE) 実行可能プログラム java.exe または java のパスを指定する。ここに入力された JRE が Java アプリケーションを起動するために、Agent Controller によって使用されます。従って、インストーラー・プログラムによって事前入力された JRE パスを変更することができます。

**注:** この時点で提供した JRE は、Agent Controller の実行と、Agent Controller が Java アプリケーションを起動するための両方に使用されます。ただし後で、これらの各機能について別々の JRE を使用するように Agent Controller を構成することができます。詳しくは、Agent Controller のヘルプ・トピック『Agent Controller で起動するようにアプリケーションを構成』を参照してください。

「次へ」をクリックして先に進みます。

10. オプション: 上記のステップ 9 で「WebSphere Application Server のリモート・サポート」を選択した場合は、IBM WebSphere Application Server のバージョンを指定する。「次へ」をクリックして先に進みます。
11. オプション: 上記のステップ 9 で「WebSphere Application Server のリモート・サポート」が選択された場合は、IBM WebSphere Application Server のバージョン 5.0 (Windows のみ) および 5.1 のパスを指定する。「次へ」をクリックして先に進みます。
12. どのホストが Agent Controller にアクセスできるかを指定する。次の中から選択できます。
  - 「このコンピューターのみ」を選択すると、ローカル・ホストだけが Agent Controller にアクセスできます。
  - 「特定のコンピューター」を選択すると、指定されたクライアントのリストが Agent Controller にアクセスできます。このオプションを選択し、上記のステップ 9 で「セキュリティー」を選択した場合は、「次へ」をクリックして、「アクセス・リスト」パネルに進みます。Agent Controller にアクセス可能なホスト名を、コンマで区切ってリストにして入力します。
  - 「任意のコンピューター」を選択すると、すべてのクライアントが Agent Controller にアクセスできます。(デフォルト選択)。

**注:** Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) などの認証メカニズムを使用する場合は、「任意のコンピューター」を選択すると、インストーラー・プロセスの完了後に Agent Controller のユーザー認証を使用不可に設定する必要があります。詳しくは、Agent Controller ドキュメンテーションを参照してください。

「次へ」をクリックして先に進みます。

13. セキュリティー設定を選択する。

注: 「任意のコンピューター」を選択した場合、デフォルトでセキュリティーが使用可能になります (下記の「有効」を参照)。通信が暗号化され、すべての接続が認証されます。セキュリティーを使用不可にする方法については、Agent Controller ドキュメンテーションを参照してください。

- **使用不可:** 通信は暗号化されず、アクセス制御は定義したホストのリストに限定されます (「任意のコンピューター」を除くデフォルトの選択。)
- **使用可能:** 通信は暗号化され、すべての接続がセキュア・ソケット通信の認証を強制されます。

「使用可能」を選択した場合は、「次へ」をクリックし、「セキュリティー」で Agent Controller に接続可能なユーザーのリストをコンマで区切って入力します。ツールを使用するために、これらのユーザーは認証が必要になります。

「次へ」をクリックして先に進みます。

14. 要約画面で「次へ」をクリックして、Agent Controller をインストールする。
15. インストールが完了したら、「終了」をクリックする。

## Agent Controller のサイレント・インストール

セットアップ・コマンドと共に以下のパラメーターを使用して、サイレント・モードでインストール・プロセスを実行することができます。

パラメーター	説明
-silent  この変数は、サイレントを使用する場合には必須です。  -V licenseAccepted=true	<b>オプション:</b> インストーラーにサイレントで実行するよう指示します。指定しない場合は、渡された入力内容を使用してインストール・ウィザードを表示します。
-P installLocation	<b>オプション:</b> インストール・パスを指定します。デフォルトのインストール・パスは、「\$D(install)/IBM/AgentController」です。  <b>例:</b>  <b>Windows:</b> C:\Program Files\IBM\AgentController  <b>UNIX<sup>(R)</sup>/Linux:</b> /opt/IBM/AgentController
-V VJavaPath	<b>必須:</b> Java 実行可能ファイルの完全修飾パスを指定します。

パラメーター	説明
-V VAccessLocal -V VAccessCustom -V VAccessAll	<p><b>オプション:</b> クライアントによる Agent Controller への接続方法を指定します (ALL、LOCAL、CUSTOM)。変数のうち 1 つだけを「true」に設定し、ほかは「false」に設定します。デフォルトは、VAccessAll="true" です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 任意のコンピューター: VAccessAll="true" : すべてのクライアントを許可します</li> <li>• このコンピューターのみ: VAccessLocal="true" : ローカル・ホストのみ許可します (デフォルト)</li> <li>• 特定のコンピューター: VAccessCustom="true" : リストにあるクライアントを許可します (-V VHosts パラメーターも必要)</li> </ul>
-V VHosts	<p><b>必須:</b> VAccessCustom="true" の場合</p> <p>コンマで区切ってクライアント・ホスト名を指定します</p>
以下の 2 つの変数は、両方とも指定し、反対に設定する必要があります。 -V VSecurity="true" or "false" -V VSecurityDisable="false" or "true"	<p><b>オプション:</b> (true、false)</p> <p>デフォルト: VSecurity=true VSecurityDisable=false</p>
-V VUsers	<p><b>必須:</b> VSecurity="true" の場合</p> <p>Agent Controller に接続できるユーザーを指定します</p>
-V VWAS6 -V VWAS5	<p><b>オプション:</b></p> <p>-V VWAS6="true" (デフォルト) : WAS V6 を使用している場合</p> <p>-V VWAS5="true" : WAS V5.x を使用している場合</p>
-V VWAS_HOME_V50 -V VWAS_HOME_V51	<p><b>オプション:</b> -V VWAS5="true" の場合</p> <p>IBM WebSphere Application Server 5.1 および 5.0 のインストール・ロケーションを指定します</p>

**例:**

**コマンド行からのインストール:**

```
-P installLocation="D:¥IBM¥AgentController"
-V VJavaPath=" D:¥jdk1.4.2¥jre¥bin¥java.exe "
-V VAccessLocal="false"
-V VAccessCustom="true"
-V VAccessAll="false"
-V VHosts="host1,host2"
```

```
-V VSecurity="true"
-V VSecurityDisable="false"
-V VUsers="user1,user2"
-V VWAS5="true"
-V VWAS_HOME_V51="D:¥WebSphere5.1¥AppServer"
-V VWAS_HOME_V50="D:¥WebSphere5.0¥AppServer"
```

### 応答ファイルを使用したインストール:

コマンド行にパラメーターを指定する代わりに、応答ファイル (setup.rsp など) を作成してパラメーターすべてを保管することができます。以下に、Windows の例を示します。Linux/UNIX プラットフォームの場合も同様です。

```
setup.exe -silent -options setup.rsp
```

応答ファイルの内容:

```
# Start of response file
-P installLocation="D:¥IBM¥AgentController"
-V licenseAccepted="true"
-V VJavaPath=" D:¥jdk1.4.2¥jre¥bin¥java.exe "
-V VAccessLocal="false"
-V VAccessCustom="true"
-V VAccessAll="false"
-V VHosts="host1,host2"
-V VSecurity="true"
-V VSecurityDisable="false"
-V VUsers="user1,user2"
-V VWAS5="true"
-V VWAS_HOME_V51="D:¥WebSphere5.1¥AppServer"
-V VWAS_HOME_V50="D:¥WebSphere5.0¥AppServer"

# End of response file
```

### Windows ワークステーションでの Agent Controller の開始と停止

- Windows では、Agent Controller システム・サービス (RAservice.exe) は自動的に開始されます。
- 「コントロール パネル」下の Windows の「サービス」ダイアログを使用して、Agent Controller サービスの開始と停止を行います (「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」>「管理ツール」>「サービス」>「IBM Rational<sup>(R)</sup> Agent Controller」)。

## Windows 以外のワークステーションでの Agent Controller の開始と停止

- Windows 以外のプラットフォームでは、Agent Controller プロセス (RAServer) は自動的に開始されません。ユーザー自身が開始する必要があります。
  - **重要:** Windows 以外のプラットフォームに対する以下の環境設定は、Agent Controller を開始する前に設定する必要があります。
    - **Solaris:** Agent Controller を開始する前に、/usr/sbin を PATH 環境に追加する必要があります。パスを設定するには、次のコマンドを入力してください:  

```
PATH=/usr/sbin:$PATH
export PATH
```
    - **AIX:** ある種の JVM では、Agent Controller と適切に連動させるために、LDR\_CNTRL 環境変数を USERREGS に設定する必要があります。この変数を設定するには、次のコマンドを実行してから RASStart.sh スクリプトを実行してください。  

```
export LDR_CNTRL=USERREGS
```
    - **Linux、AIX、Solaris、HP-UX、z/OS:** RAServer では、libjvm.so などの実行可能ライブラリーが含まれた JRE のディレクトリーをライブラリー・パス環境変数に追加する必要があります。以下の表は、各プラットフォームでサポートされる JVM のデフォルトのインストール場所を基に、そのプラットフォームのパス変数設定を示したものです。
- 注:** 入力するパスは、Agent Controller をインストールするときに指定する JRE のパスに一致している必要があります。指定した JRE は、Agent Controller が Java アプリケーションを起動するために使用します。

プラットフォーム	ライブラリー・パス設定
AIX	LIBPATH=/usr/java14/jre/bin: /usr/java14/jre/bin /classic:\$LIBPATH export LIBPATH
HP-UX	SHLIB_PATH=/opt/java1.4/jre/ lib/PA_RISC/server:/opt/java1.4/ jre/lib/PA_RISC:\$SHLIB_PATH  export SHLIB_PATH
Linux/IA32	LD_LIBRARY_PATH=/opt/IBMJava2-141/ jre/bin/classic:/opt/IBMJava2-141 /jre/bin:\$LD_LIBRARY_PATH  export LD_LIBRARY_PATH
Linux/PPC64	LD_LIBRARY_PATH=/opt/IBMJava2-ppc64-142/ jre/bin:/opt/IBMJava2-ppc64-142/ jre/bin/classic:\$LD_LIBRARY_PATH  export LD_LIBRARY_PATH
Linux/390	LD_LIBRARY_PATH=/opt/IBMJava2-s390-141/ jre/bin/classic:/opt/IBMJava2-s390-141/ jre/bin:\$LD_LIBRARY_PATH  export LD_LIBRARY_PATH

プラットフォーム	ライブラリー・パス設定
Solaris	LD_LIBRARY_PATH=/usr/j2sdk1.4.2_04/jre/lib/sparc/server:/usr/j2sdk1.4.2_04/jre/lib/sparc:\$LD_LIBRARY_PATH  export LD_LIBRARY_PATH
z/OS	LIBPATH=/usr/lpp/java/IBM/J1.4/bin/classic:/usr/lpp/java/IBM/J1.4/bin:\$LIBPATH  export LIBPATH

- Agent Controller プロセスを開始するには、インストール場所の **bin** ディレクトリー (例えば、/opt/IBM/AgentController/bin) に変更して、以下を実行します。  
./RASstart.sh
- Agent Controller プロセスを停止するには、インストール場所の **bin** ディレクトリー (例えば、/opt/IBM/AgentController/bin) に変更して、以下を実行します。  
./RASstop.sh

## Windows ワークステーションからの Agent Controller のアンインストール

- Agent Controller は、コントロールパネルの下にある「プログラムの追加と削除」ダイアログから除去することができます。
- サイレント・アンインストールを実行するには、インストール・ロケーションの **\_uninst** ディレクトリー (例: C:\Program Files\IBM\AgentController\\_uninst) からコマンド `uninstall.exe -silent` を実行します。

## Windows 以外のワークステーションからの Agent Controller のアンインストール

1. インストール場所の **\_uninst** ディレクトリーからプログラム **uninstall.bin** を実行します (例、/opt/IBM/AgentController/\_uninst)。
2. 画面の指示に従って、アンインストールを完了します。
3. サイレント・アンインストールを実行するには、コマンド `uninstall.bin -silent` を使用します。

## ワークステーション上に複数の参照を持つ Agent Controller のアンインストール

Agent Controller バージョン 7.0.1 では、製品の複数のインスタンスが 1 つのワークステーション上にインストールされることを抑制しています。追加のインストールが実行された場合は、スタンドアロン・インストールによるものであっても、製品内に組み込まれたインストールによるものであっても、Agent Controller は新規インストールを開始する製品の名前への参照を記録します。

Agent Controller が複数回インストールされた場合、つまり、スタンドアロン・インストールによるものであれ、製品内に組み込まれているインストールとしてであれ、複数の参照数がある場合は、参照している最後の製品がアンインストールされ

た場合に限り、Agent Controller をアンインストールができます。しかし、参照している最後の製品には、まだ Agent Controller が必要です。

別の製品によって必要とされている場合に、Agent Controller のアンインストールを試みても、アンインストールは行われず、「この製品は他の製品から必要とされているため、アンインストールできません」というメッセージを受け取ります。

## OS/400 (iSeries) への Agent Controller のインストール

### Agent Controller の前のバージョンのアンインストール

Agent Controller の前のバージョンがある場合は、それを停止し、アンインストールしてからこのバージョンをインストールしてください。

### Agent Controller のインストール

1. iSeries ホストに、HYADESDC という名前のライブラリーと IBMRAC という名前の別のライブラリーを作成します。

```
CRTLIB HYADESDC
CRTLIB IBMRAC
```

2. iSeries ホストの HYADESDC ライブラリーに、HYADESDC.SAVF という名前の空の保管ファイルを作成します。

```
CRTSAVF HYADESDC/HYADESDC
```

3. iSeries ホストの IBMRAC ライブラリーに、IBMRAC.SAVF という名前の空の保管ファイルを作成します。

```
CRTSAVF IBMRAC/IBMRAC
```

4. FTP の BINARY モード転送を使用して IBMRAC.SAVF ファイルをインストール CD から、iSeries ホストにある IBMRAC ライブラリーに追加します。

5. FTP の BINARY モード転送を使用して HYADESDC.SAVF ファイルをインストール CD から、iSeries ホストにある HYADESDC ライブラリーに追加します。

6. 次のように入力して、iSeries ホストにある HYADESDC.SAVF 保管ファイルを、HYADESDC ライブラリーに復元します。

```
RSTOBJ OBJ(*ALL) SAVLIB(HYADESDC) DEV(*SAVF) SAVF(HYADESDC/HYADESDC)
```

7. 次のように入力して、iSeries ホストにある IBMRAC.SAVF 保管ファイルを、IBMRAC ライブラリーに復元します。

```
RSTOBJ OBJ(*ALL) SAVLIB(IBMRAC) DEV(*SAVF) SAVF(IBMRAC/IBMRAC)
```

8. QShell を開始して、Integrated File System (IFS) 上に /opt/hyadesdc ディレクトリーを作成します。

9. HYADESDC の保管ファイル HYADESIFS.SAVF を IFS ディレクトリー /opt/hyadesdc に復元します。例:

```
RST DEV('/QSYS.LIB/HYADESDC.LIB/HYADESIFS.FILE')
OBJ('/opt/hyadesdc/*')
```

10. IBMRAC にある IBMRACIFS.SAVF 保管ファイルを、IFS ディレクトリー /opt/hyadesdc に復元します。例えば、次のコマンドを 1 行で入力します。

```
RST DEV('/QSYS.LIB/IBMRAC.LIB/IBMRACIFS.FILE') OBJ('/opt/hyadesdc/*')
ALWOBJDIF(*ALL)
```

各国語パックをインストールする場合は、以下のステップ 11 から 16 までを実行してください。インストールしない場合は、ステップ 17 に進みます。

11. iSeries ホストの HYADESDC ライブラリーに、HYADESNL1.SAVF および HYADESNL2.SAVF という名前の 2 つの空の保管ファイルを作成します。

```
CRTSAVF IBMRAC/HYADESNL1
CRTSAVF IBMRAC/HYADESNL2
```

12. FTP の BINARY モード転送を使用して、NL ファイル HYADESNL1.SAVF および HYADESNL2.SAVF を、インストール CD から iSeries ホストにあるライブラリー HYADESDC に追加します。

13. iSeries ホストの IBMRAC ライブラリーに、IBMRACNL1.SAVF および IBMRACNL2.SAVF という名前の 2 つの空の保管ファイルを作成します。

```
CRTSAVF IBMRAC/IBMRACNL1
CRTSAVF IBMRAC/IBMRACNL2
```

14. FTP の BINARY モード転送を使用して、NL ファイル IBMRACNL1.SAVF および IBMRACNL2.SAVF を、インストール CD から iSeries ホストにあるライブラリー IBMRAC に追加します。

15. HYADESDC の保管ファイル HYADESNL1.SAVF および HYADESNL2.SAVF を IFS ディレクトリー /opt/hyadesdc に復元します。例えば、次のコマンドを 1 行で入力します。

```
RST DEV('/QSYS.LIB/HYADESDC.LIB/HYADESNL1.FILE') OBJ
('/opt/hyadesdc/*') ALWOBJDIF(*ALL)
RST DEV('/QSYS.LIB/HYADESDC.LIB/HYADESNL2.FILE') OBJ
('/opt/hyadesdc/*') ALWOBJDIF(*ALL)
```

16. IBMRAC の保管ファイル IBMRACNL1.SAVF および IBMRACNL2.SAVF を IFS ディレクトリー /opt/hyadesdc に復元します。例えば、次のコマンドを 1 行で入力します。

```
RST DEV('/QSYS.LIB/IBMRAC.LIB/IBMRACNL1.FILE') OBJ('/opt/hyadesdc/*')
ALWOBJDIF(*ALL)
RST DEV('/QSYS.LIB/IBMRAC.LIB/IBMRACNL2.FILE') OBJ('/opt/hyadesdc/*')
ALWOBJDIF(*ALL)
```

17. Agent Controller をインストールしたら、インストール場所の bin ディレクトリー /opt/hyades/bin にディレクトリーを変更し、次を入力してセットアップ・スクリプトを実行します。

```
./SetConfig.sh
```

18. 画面上のプロンプトに従って、Agent Controller を構成します。

## OS/400 (iSeries) での Agent Controller の開始および停止

1. Agent Controller を開始するには、HYADESDC および IBMRAC ライブラリーをライブラリー・リストに追加します。

```
ADDLIBLE HYADESDC
ADDLIBLE IBMRAC
```

2. 以下を入力して RASstart ジョブを実行依頼します。

```
SBMJOB CMD(CALL RASERVER) JOBD(RASSTART)
```

3. Agent Controller を停止するには、以下を入力して RASstart ジョブを停止します。

```
ENDJOB JOB(RASSTART)
```



あるいは、インストール・ロケーションの bin ディレクトリー /opt/hyades/bin にディレクトリーを変更し、次を入力して停止スクリプトを実行します。

```
./RASstop.sh
```

## OS/400 (iSeries) からの Agent Controller のアンインストール

1. HYADESDC および IBMRAC ライブラリーを除去します。
2. IFS ディレクトリー /opt/hyadesdc (すべてのサブディレクトリーとファイルを含む) を除去します。

## z/OS (OS/390) への Agent Controller のインストール

### Agent Controller の前のバージョンのアンインストール

Agent Controller の前のバージョンがある場合は、それを停止し、アンインストールしてからこのバージョンをインストールしてください。

### Agent Controller のインストール

1. UNIX システム・サービス・シェルで、Agent Controller をインストールしたいディレクトリーに移動します。/usr/lpp/ ディレクトリーにインストールすることをお勧めします。
2. インストール・イメージ **ibmrac.os390.pax** と **tptpdc.os390.pax** をインストール・ディレクトリーに転送します。
3. Agent Controller ファイルを抽出するために、次のコマンドを実行します。

```
pax -ppx -rvf ibmrac.os390.pax
```

4. 次のコマンドを実行して、テストおよびパフォーマンス・ツール (TPTP) の Agent Controller ファイルを抽出します。

```
pax -ppx -rvf tptpdc.os390.pax
```

5. インストール bin ディレクトリー <rac\_install\_dir>/bin にディレクトリーを変更し、次を入力してスクリプトを実行し、Agent Controller ライブラリーへのリンクを作成します。

```
./createLinks.sh
```

6. UNIX システム・サービス・シェルで以下のコマンドを発行して、Agent Controller 共用オブジェクト・ファイルをプログラム制御にします。

```
extattr +p /usr/lpp/IBM/AgentController/lib/*.so
```

各国語パックをインストールする場合は、以下のステップ 7 からステップ 8 までを実行してください。インストールしない場合は、ステップ 9 に進みます。

7. NL インストール・イメージ **tptpdc.nl1.os390.pax**、**tptpdc.nl2.os390.pax**、**ibmrac.os390.nl1.pax**、**ibmrac.os390.nl2.pax** をインストール・ディレクトリーに転送します。
8. Agent Controller ファイルを抽出するために、次のコマンドを実行します。

```
pax -ppx -rf tptpdc.nl1.os390.pax
pax -ppx -rf tptpdc.nl2.os390.pax
pax -ppx -rf ibmrac.os390.nl1.pax
pax -ppx -rf ibmrac.os390.nl2.pax
```

9. Agent Controller をインストールしたら、インストール場所の bin ディレクトリー /usr/lpp/IBM/AgentController/bin にディレクトリーを変更し、次を入力してセットアップ・スクリプトを実行します。

```
./SetConfig.sh
```

10. 画面上のプロンプトに従って、Agent Controller を構成します。

#### **z/OS でのデータ・チャネル使用法:**

serviceconfig.xml ファイル内に大規模な dataChannelSize を設定するには、ご使用のマシンの共用メモリー・セグメントの最大サイズ設定を増やす必要があります。それには、BPXPRMxx parmlib メンバー内の IPCSHMMPAGES 値を増やします。この値は、データ・チャネルに許可される 4K ページの最大数です。例えば、dataChannelSize を 32M にしたい場合には、IPCSHMMPAGES を 8192 より大きい値に設定します。

Agent Controller に多数のエージェントとの同時通信を許可するには、BPXPRMxx parmlib メンバー内の IPCSHMNSEGS 値を適切な値に設定します。この値は、各アドレス・スペースの接続共用メモリー・セグメントの最大数を指定します。デフォルト値は 10 なので、これを 50 に増やす必要があります。

Agent Controller の使用するデータ・チャネルについて詳しくは、Agent Controller のオンライン・ヘルプ情報を参照してください。

z/OS BPXPRMXX parmlib メンバーの詳細およびその更新方法については、「*IBM z/OS MVS™ 初期設定およびチューニング 解説書*」を参照してください。

#### **z/OS (OS/390) での Agent Controller の開始および停止**

注: RAServer では、libjvm.so などの実行可能ライブラリーを含む JRE のディレクトリーを LIBPATH 環境変数に追加する必要があります。例えば、IBM JRE 1.4.1 を使用している場合、LIBPATH 変数は次のように設定されます。

```
export LIBPATH=/usr/lpp/java/IBM/J1.4/bin/classic:  
/usr/lpp/java/IBM/J1.4/bin:$LIBPATH
```

- root としてログインし、/usr/lpp/IBM/AgentController/bin ディレクトリーを開き、以下のコマンドを発行してサーバーを開始します。

```
./RASStart.sh
```

- サーバーを停止するには、root としてログインし、/usr/lpp/IBM/AgentController/bin ディレクトリーを開き、以下のコマンドを発行します。

```
./RASStop.sh
```

#### **z/OS (OS/390) での Agent Controller のアンインストール**

- Agent Controller をインストールするときに createLinks.sh を実行した場合は、/usr/lpp/IBM/AgentController/bin ディレクトリーに移動して、以下のコマンドを発行します。

```
./removeLinks.sh
```

- 以下のコマンドを実行して、IBMRAC ディレクトリーとそのサブディレクトリーすべてを除去します。

```
rm -rf /usr/lpp/IBM/AgentController
```

## Agent Controller セキュリティー機能の使用

以下のリストには、すべてのプラットフォームで Agent Controller のセキュリティー機能を使用するためのヒントが含まれています。

- オペレーティング・システムによって認証が付与されます。インストール時に指定されたユーザーのみが認証を許可されます。ユーザー名として ANY が指定されると、有効なユーザー名とパスワードのペアは、すべて認証のためにオペレーティング・システムに送られます。それ以外の場合は、リストされたペアのみが送られます。
- セキュリティーが使用可能になっている場合、インストール時に指定されたユーザーは、Agent Controller との情報を交換を行う前に、オペレーティング・システムの認証を受ける必要があります。ワークベンチのユーザーは、オペレーティング・システムのユーザー名とパスワードである、有効なユーザー名およびパスワードの組み合わせを提供する必要があります。
- **(Windows のみ)** ドメイン・ネームのパスワードは認証されません。ローカル・ユーザー名とパスワードのペアを指定する必要があります。
- 鍵管理機能は提供されません。Agent Controller は、セキュリティーのために Java 鍵ストアを使用します。
- デフォルトの鍵ストアとエクスポート済み証明書は、Windows では Agent Controller ディレクトリーの <rac\_install\_dir>%security にあり、Linux では <rac\_install\_dir>/security にあります。ここで、<rac\_install\_dir> は Agent Controller のインストール・ディレクトリーです。これらは例として示されています。意味のある証明書を含む鍵ストアで置き換える必要があります。

## ワークベンチおよび Agent Controller 間の互換性についての要約

**後方互換性** (バージョン 6.0.1 Agent Controller を使用して古いワークベンチを使用): 互換性があります。新しい Agent Controller は、前のバージョンの機能をすべてサポートします (例: 制御チャネルのセキュリティー)。ただし、多重方式などの新機能は使用できません (安全を確保するために制御チャネルを介してデータを戻します)。

**前方互換性** (古い Agent Controller を使用した 6.0.1 ワークベンチの使用): 一般的に、互換性がなく、サポートされていません。

**バージョンの異なる Agent Controller 間の互換性:** 一部の製品またはツール (IBM Performance Optimization Toolkit など) では、複数のホスト上の Agent Controller (ワークベンチは別にして) が互いに検出し合い、通信する必要があります。この機能について言えば、あるバージョンから次のバージョンに変更することは、この機能を使用する必要がある場合は、すべての関連ホスト上で Agent Controller バージョン 6.0.0.1 または Agent Controller バージョン 6.0.1 のいずれかを使用する必要があることを意味します。つまり、Agent Controller インスタンス間で動的ディスカバリーを使用する場合は、異なるバージョンを組み合わせることはできません。

## 既知の問題と制限事項

このセクションでは、Agent Controller のインストールおよびアンインストールに関する既知の問題と制限について説明します。特に記載がなければ、以下の情報は Agent Controller をサポートするすべてのオペレーティング・システムに適用されません。

### Agent Controller は Windows 以外のプラットフォームで始動に失敗することがあります

Agent Controller は Windows 以外のプラットフォームで始動に失敗し、以下のメッセージが表示されることがあります。

```
RAServer failed to start. (RAServer が始動に失敗しました)
```

この障害は通常、TCP/IP ポート 10002 が空いていないために起こります。Agent Controller はデフォルトでこのポートを listen します。Agent Controller が開始されたときにシステム上で別のプロセスがこのポートを使用しているか、または Agent Controller が停止され、その後再始動されたばかりで、ポートがまだ解放されていないことが考えられます。

Agent Controller が開始に失敗した場合は、以下の方法で開始することができます。

- ポート 10002 が他のプロセスによって使用中である場合は、`serviceconfig.xml` ファイルを編集してポート番号を変更できます。これについては、ドキュメンテーションに説明があります。

注: `serviceconfig.xml` ファイルに構成されている通信ポート番号が変更された場合、WebSphere Application Server 構成に定義されているプロパティ `INSTANCE_RAC_PORT_NUM_ID` を同じポート番号に変更する必要があります。

- Agent Controller が停止したばかりの場合は、数分待って再始動してください。

### その他のインストールおよびアンインストール中のエラー

インストールまたはアンインストール中にエラーを検出する場合は、実行中のプロセスによって Agent Controller のオブジェクト・ファイルがロードされるためだと考えられます。オブジェクト・ファイルが確実に変更されるように、以下の操作を行ってください。

1. Eclipse ワークベンチをシャットダウンします。
2. Java Profiling Agent または J2EE Request Profiler のいずれかを含む、すべての `java.exe` プロセスを終了します。

---

## ClearCase LT のインストール

Rational ClearCase LT は、小規模なプロジェクト・チーム向けの構成管理ツールです。ClearCase LT は、小規模なプロジェクト・ワークグループから、分散されたグローバル企業まで対応する、IBM Rational ClearCase 製品ファミリーの一部です。

インストール・メディアには、Rational ClearCase LT バージョン 7.0.0.0 が入っており、Rational Application Developer とは別にインストールされます。

ClearCase LT が既にワークステーションにインストールされている場合は、それを現行バージョンにアップグレードできます。旧バージョンからのアップグレードについては、ClearCase LT のインストール文書を参照してください。

Rational Application Developer と ClearCase LT を連携させて作業できるようにするには、Rational ClearCase SCM アダプター・フィーチャーをインストールする必要があります。デフォルトでは、このフィーチャーは Rational Application Developer をインストールする際に選択されていますが、これを組み込まなかったとしても、IBM Installation Manager の「パッケージの変更」ウィザードを使用して、後でインストールできます。詳しくは、65 ページの『インストールの変更』を参照してください。

Rational ClearCase SCM アダプターは、有効にしてからでなければ使用できません。アダプターを有効にして使用方法については、オンライン・ヘルプを参照してください。

## ClearCase LT のインストール説明およびリリース情報の探索

Rational ClearCase LT をインストールする場合の詳細な説明については、ClearCase LT インストール・メディアに添付されているインストール文書を参照してください。また、製品のインストール前に、ClearCase LT リリース情報を一読されることを強くお勧めします。

一部の文書は、Acrobat PDF ファイルになっています。ファイルを開くには、Adobe Reader ソフトウェアが必要です。これは、<http://www.adobe.com/products/acrobat/readstep2.html> からダウンロードできます。

Windows の場合: インストールの説明およびリリース情報は、ClearCase LT インストール・ランチパッドから表示できます。96 ページの『Rational ClearCase LT のインストールの開始』を参照してください。

- インストールの説明を開くには、次のようにします。
  1. Windows の場合: 1 枚目の ClearCase LT インストール CD (または電子イメージのディスク・ディレクトリー) から、`doc\books\install.pdf` を開きます。  
「*IBM Rational ClearCase, ClearCase MultiSite®, and ClearCase LT Installation and Upgrade Guide, Version 7.0*」(Windows) が開きます。
  2. Linux の場合:<http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?uid=pub1gi11636600> の説明を参照した上で、「*IBM Rational ClearCase, ClearCase MultiSite, and ClearCase LT Installation Guide, 7.0, Linux and UNIX*」をダウンロードします。
- Linux の場合: 「*IBM Rational ClearCase, ClearCase MultiSite, and ClearCase LT Installation and Upgrade Guide, Version 7.0*」(Linux) が開きます。

## IBM Publications Center からの文書の取得

Rational ClearCase LT のインストール説明およびリリース情報は、IBM Publications Center からダウンロードすることもできます。

1. <http://www.ibm.com/shop/publications/order> にアクセスします。
2. Publications Center の「Welcome」ページで、国/地域を選択する。
3. 「マニュアル検索」をクリックします。

4. 該当する検索フィールドに、文書タイトルまたは資料番号を入力します。
  - 文書をタイトルで検索するには、「キーワード」フィールドにタイトルを入力します。
  - 文書を資料番号 (資料 ID) で検索するには、「資料番号」フィールドに番号を入力します。

表 1. ClearCase の資料番号

文書	資料番号
IBM Rational ClearCase、ClearCase MultiSite、ClearCase LT Windows インストールおよびアップグレードガイド	GI88-8709-00
IBM Rational ClearCase、ClearCase MultiSite、ClearCase LT インストールおよびアップグレードガイド (UNIX)	GI88-8710-00
IBM Rational ClearCase LT Release Notes®	GI11-6369-00

## Rational ClearCase LT のインストールの開始

このセクションでは、Rational ClearCase LT のインストール・プロセスの開始について説明します。製品をインストールする場合は、「Rational ClearCase LT Installation Guide」に記載の詳細なインストール説明を参照してください。インストールの前に、リリース情報を一読されることを強くお勧めします。

### Windows への Rational ClearCase LT のインストールの開始

1. 次のいずれかの方法を使用して、Rational ClearCase LT ランチパッド・プログラムを開始します。
  - Rational Application Developer ランチパッド・プログラム (33 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照) から、「**Rational ClearCase LT**」をクリックします。
  - Rational ClearCase LT の 1 枚目の CD を挿入します。ランチパッド・プログラムが自動的に始動します。プログラムが実行されない場合は、その CD またはディスク・イメージのルートから、`setup.exe` を実行してください。
2. リリース情報をまだ読んでいない場合は、一読します。
3. 「**IBM Rational ClearCase LT のインストール**」をクリックします。Rational ClearCase LT セットアップ・ウィザードが開きます。

セットアップ・ウィザードの指示に従って、インストールを完了します。

### Linux への Rational ClearCase LT のインストール

Rational ClearCase LT バージョン 7.0 を Linux ワークステーションにインストールする場合の詳細な説明は、「*IBM Rational ClearCase, ClearCase MultiSite, and ClearCase LT Installation Guide, 7.0, Linux and UNIX*」にあります。この文書は、<http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?uid=pub1gi11636600> からダウンロードできます。

## Rational ClearCase LT ライセンスの構成

Rational Application Developer が Rational ClearCase LT と同じコンピューターにインストールされている場合は、Rational ClearCase LT のライセンスの構成を行う必要はありません。しかし、Rational ClearCase LT を Rational Application Developer なしでインストールする場合は、ClearCase LT のライセンスの構成を行う必要があります。

ライセンスの構成について詳しくは、ClearCase LT のインストール・ガイド を参照してください。

---

## Crystal Reports Server XI Release 2 のインストール

Crystal Reports Server XI Release 2 はデータ・アクセス、レポート作成、および情報配信のための共通のアーキテクチャーです。これは既存のデータ、Web、およびアプリケーション投資と統合するように設計されています。Crystal Reports Server XI Release 2 は Crystal Reports を基に、多くのユーザーに対して情報をスケーリングするための有効なソリューションです。

Crystal Reports Server XI Release 2 は、複雑な対話式のレポートを Web で管理して安全に配布したり、イントラネット、エクストラネット、インターネット、および企業のポータル・アプリケーションに統合するための中央プラットフォームです。また、Windows と Linux の両方で使用することができます。

Crystal Reports Server XI Release 2 はレポート作成、分析、および情報配信のための統合スイートとして、エンド・ユーザーの生産性を向上し、管理業務を削減するためのソリューションを提供します。

## Windows への Crystal Reports Server XI Release 2 のインストール

このデフォルト・インストールを実行すると、すべてのクライアントとサーバーのコンポーネントがワークステーションにインストールされます。中央管理サーバー (CMS) 用の MySQL データベースは、自動的に作成されます。デフォルトのユーザーとグループのアカウントが作成され、ご使用のシステムにサンプル・レポートが発行されます。インストールが完了すると、ワークステーションでサーバー・コンポーネントがサービスとして開始します。

Windows に Crystal Reports Server XI Release 2 のすべてのコンポーネントをインストールするには、次のようにします。

1. Rational Application Developer のインストール・ランチパッドから、「**Crystal Reports Server XI Release 2 のインストール (Install Crystal Reports Server XI Release 2)**」をクリックします。CD ROM からインストールする場合は、1 枚目の Crystal Reports Server XI Release 2 for Windows インストール・ディスクを CD ROM ドライブに挿入するよう、プロンプトが出されます。
2. Rational Application Developer のインストール・ランチパッドから、「**Crystal Reports Server XI Release 2 のインストール (Install Crystal Reports Server XI Release 2)**」をクリックします。

3. 「セットアップ」ウィザードでセットアップ言語を選択し、「OK」をクリックします。これは、インストールされる言語ではなく、インストール・プロセスで使用される言語です。
4. 「ようこそ」ページで、「OK」をクリックします。
5. 「ご使用条件」ページでご使用条件を読み、契約条件に同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。
6. 「クライアントまたはサーバーのインストールの選択 (Select Client or Server Installation)」ページで、「サーバー・インストールの実行 (Perform Server Installation)」をクリックします。

**注:**

このオプションを選択すると、必要なすべての Crystal Reports Server コンポーネントがインストールされます。「クライアント・インストールの実行 (Perform Client Installation)」オプションを選択すると、Crystal Reports Server 環境をリモートで管理する際に使用できるマシンにのみ、クライアント・ツールがインストールされます。

7. 「セットアップ」ウィザードと「ディレクトリー選択」ページの指示に従って、デフォルト・ロケーション (C:\Program Files\Business Objects\BusinessObjects Enterprise 11.5) を受け入れ、「次へ」をクリックしてステップ 9 に進みます。
  8. デフォルト・ロケーション以外のドライブにインストールすることを選択すると、「セットアップ」ウィザードは、Crystal Reports などの Business Objects 製品でも使用される共有ファイルのインストール用ドライブを選択するよう求めます。デフォルトのシステム・ドライブにファイルをインストールせずに、複数の Business Objects 製品を同じマシンにインストールするには、まず、Crystal Reports Server をインストールします。その後で Crystal Reports をインストールすると、Crystal Reports Server で作成された共通ファイル・ディレクトリーが使用されます。
  9. 「インストール・タイプ (Install Type)」ページで、「新規」をクリックして以下のステップを実行します。
    - MySQL データベースを CMS データベースとしてインストールする場合は、「MySQL データベース・サーバーのインストール (Install MySQL database server)」をクリックし、「次へ」をクリックしてステップ 10 に進みます。これが推奨されるインストールです。
    - CMS に別のデータベース (Oracle や Sybase など) を使用する場合は、「既存のデータベース・サーバーを使用 (Use an existing database server)」をクリックして「次へ」をクリックします。
- 既存のデータベース・サーバーの使用方法についての説明は、「BusinessObjects Enterprise Installation Guide」を参照してください。この情報は、『Installing BusinessObjects Enterprise on Windows』という章の『New installation』というセクションにあります。
10. MySQL データベースを CMS データベースとしてインストールすることを選択した場合は、以下のステップを実行します。
    - a. ポート番号を入力します。
    - b. MySQL のルート・ユーザー・アカウントで使用するパスワードを入力して、確認します。



- c. デフォルト・ユーザー名を受け入れて CMS データベースにアクセスするか、新規ユーザー名を入力して、デフォルト名をオーバーライドします。
  - d. CMS データベースへのアクセスに使用するパスワードを入力して、確認します。
  - e. 「次へ」をクリックします。
11. 「Web コンポーネント・アダプター・タイプの選択 (Choose Web Component Adapter Type)」 ページで、以下のステップのいずれかを実行します。
- Java Web コンポーネント・アダプターのみを使用し、ユーザー独自の Java アプリケーション・サーバーを使用する場合は、「**Java アプリケーション・サーバー (Java application server)**」をクリックし、「**インストール済み Java アプリケーション・サーバーを使用 (Use preinstalled Java application server)**」をクリックして、「**IIS ASP.NET**」チェック・ボックスをクリアしてから、「次へ」をクリックします。その後、ステップ 13 に進みます。
  - Java Web コンポーネント・アダプターのみを使用して Tomcat をインストールする場合は、「**Java アプリケーション・サーバー (Java application server)**」をクリックし、「**Tomcat アプリケーション・サーバーのインストール (Install Tomcat application server)**」をクリックして、「**IIS ASP.NET**」をクリアしてから、「次へ」をクリックします。その後、ステップ 12 に進みます。
  - IIS ASP.NET Web コンポーネント・アダプターのみを使用する場合は、「**Java アプリケーション・サーバー (Java application server)**」チェック・ボックスをクリアし、「**Web サイトの選択 (Choose website)**」リストから「**IIS ASP.NET**」チェック・ボックスを選択してデフォルトを受け入れるか、WAR ファイルのデプロイ先 Web サイトを選択して、「次へ」をクリックします。その後、ステップ 13 に進みます。
  - Java と IIS ASP.NET の両方の Web コンポーネント・アダプターを使用する場合は、「**Web サイトの選択 (Choose website)**」リストから「**Java アプリケーション・サーバー (Java application server)**」と「**IIS ASP.NET**」の両方を選択し、デフォルトを受け入れるか、WAR ファイルのデプロイ先 Web サイトを選択して、「**インストール済み Java アプリケーション・サーバーを使用 (Use preinstalled Java application server)**」または「**Tomcat アプリケーション・サーバーのインストール (Install Tomcat application server)**」のいずれか一方をクリックし、「次へ」をクリックします。その後、ステップ 12 またはステップ 13 に進みます。
12. Tomcat アプリケーション・サーバーをインストールすることを選択した場合は、デフォルトを受け入れるか、デフォルトのインストール・ロケーションを変更して、接続ポート、シャットダウン・ポート、およびリダイレクト・ポートを構成し、「次へ」をクリックします。

**注:**

Crystal Reports Server を BusinessObjects Enterprise 6.x デプロイメントと同じマシンにインストールする場合は、デフォルト・ポート番号 8080 を使用しないでください。このポート番号は、別のデプロイメントですでに使用されている場合があります。

13. 「インストールの開始 (Start Installation)」ページで、「次へ」をクリックします。インストールが開始します。インストール・プロセス中に、マシンのレポートと製品の登録を求めるプロンプトが出されることがあります。
14. 「セットアップ」ウィザードの最終ページで、ユーザー独自のレポートを Crystal Reports Server に即時に発行しない場合は「**BusinessObjects 管理コンソールの起動 (Launch BusinessObjects Administration Console)**」をクリアし、「終了」をクリックします。

## Windows からの Crystal Reports Server XI Release 2 のアンインストール

Windows から Crystal Reports Server XI Release 2 をアンインストールするには、次のようにします。

1. 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロール パネル」の順にクリックします。
2. 「コントロール パネル」ウィンドウで、「プログラムの追加と削除」をクリックします。
3. 「プログラムの追加と削除」ウィンドウで、「Crystal Reports Server XI Release 2」を選択して、「削除」を選択します。

## Linux への Crystal Reports Server XI Release 2 のインストール

**重要:** root 特権を持っている場合は、Crystal Reports Server をインストールできません。インストールするには、非 root ユーザーでなければなりません。

Linux に Crystal Reports Server XI Release 2 をインストールするには、次のようにします。

1. 次のようにして、1 枚目の Crystal Reports Server XI Release 2 for Linux インストール・ディスクにアクセスする。
  - 1 枚目の Crystal Reports Server XI Release 2 for Linux インストール・ディスクを CD ROM ドライブに挿入する。
  - 電子イメージからインストールする場合は、1 枚目の Crystal Reports Server XI Release 2 for Linux ディスクに対応するディスク・ディレクトリーにナビゲートする。このディレクトリーは、電子イメージを解凍したディレクトリーです。
2. xir2\_crs\_quickinstall\_linux\_en.pdf ファイルを開く。このファイルは、インストール・ディスクの /docs/en サブディレクトリーにあります。このファイルには、Crystal Reports Server XI Release 2 を Linux にインストールするための完全な解説が記載されています。システムを準備してインストール・プロセスを実行するには、このファイル内の解説を参照する必要があります。また、製品をインストールする前に、release.pdf ファイルの『Installation』セクションも参照してください。このファイルは、インストール・ディスクのルート・ディレクトリーにあります。
3. インストール・スクリプトの実行を開始する前に、PDF ファイルの『Quick Installation Guide for Crystal Reports Server on Linux』セクションを参照して、すべての必要な作業を実行する。

4. 製品をインストールする前に、すべてのアンチウイルス・ソフトウェアを無効にする。
5. PDF ファイルの『Beginning Your Installation』の解説に従って、インストール・プロセスを実行する。このセクションでは、ユーザー・インストールの手順が説明されています。

## Linux からの Crystal Reports Server XI Release 2 のアンインストール

Linux から Crystal Reports Server XI Release 2 をアンインストールするには、ソフトウェアのインストール・ディレクトリー内のアンインストール・スクリプトを実行します。

元のインストール中にインストールされたすべてのファイルが削除されます。



---

## 特記事項

© Copyright IBM Corporation 2000, 2007. All rights reserved.

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711

東京都港区六本木 3-2-12

IBM World Trade Asia Corporation

Intellectual Property Law & Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様自身の責任でご使用ください。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

*Intellectual Property Dept. for Rational Software  
IBM Corporation  
3600 Steeles Avenue East  
Markham, Ontario  
Canada L3R 9Z7*

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

---

## 商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

- AIX
- ClearCase
- developerWorks®
- IBM
- ibm.com
- iSeries
- MultiSite
- MVS™
- OS/390
- OS/400
- Passport Advantage
- POWER5
- PowerPC
- pSeries
- Rational
- RS/6000
- WebSphere
- z/OS
- zSeries

Intel、Itanium、および Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft および Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。









Printed in Japan

GI88-4097-04



日本アイ・ビー・エム株式会社  
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12